

特 217

157

岳南讀本

6
7
8
9
18
30
1
2
3
4
5
6
7
8
9
18
4

始



特217
157



京都府立福知山中學校編

名
南
讀
本



11
18

序

郷土は我等の心身の古里であり、我等の全生命の深く根ざしてある大地である。随つて我等の氣質、氣風も自ら此の郷土で養はれ來つたのである。山川草木の風物はもとより、あの社、この家と、何とはなしに思慕の情は盡きない。殊に此の中に輩出した幾多の偉人、先賢に對しては、限りない誇とあこがれを感じるものである。

然し此の郷土感情を、更に向上させ合理化せしむる爲には、その公正な認識が肝要である。所謂「燈臺下くらし」であつてはならぬ。即ち郷土の過去と現在とを知り、其の將來への理想を樹立し、之を國土愛にまで結合せしめねばならぬ。

幸に本校には、先に保護者會の厚意により、郷土室を設け、多數の資料を蒐集して、生徒の郷土理解に努めて來たが、今爰に其の内の中心となるものを

選んで、岳南讀本を編むこととした。

將來、更に郷土室の活用を盛にし、此の書物を繕いて、我が郷土の眞の姿を認識し、偏狹な愛郷心に捉れず、岳南健兒の面目にかけて、これを至純な愛國心にまで昂めるやうに努めんことを望む。

終に本書の編纂について、尾崎・佐々木・岡部・日野・栗栖・村上・難波・八田・藤森諸教諭の勞に對して感謝の意を表す。

昭和十七年七月

京都府立福知山中學校長 森 田 新 三 識

岳 南 讀 本 目 次

- 一、孝子芦田爲助……………一
- 二、蘭學者朽木昌綱……………一〇
- 三、滴水禪師……………三三
- 四、眞下飛泉……………三三
- 五、波多野鶴吉翁……………四九
- 六、福知山藩藩政概略……………六一
- 七、傳説の大江山……………八六

八、福知山盆地と由良川……………六

九、福知山市……………九

一〇、長田野……………一〇三

一一、内宮山の自然……………一二

一二、田倉山と夜久野ヶ原……………一三

一三、郷土の著名な神社……………一六

目次終

岳南讀本

一、孝子芦田爲助

丹波の國は、山の國。大波小波が打ちよせるやうに、つらなつて居る山脈。其の間を分けて東南から西北へ、一すぢ銀の帯のやうに流れて居る川を、福知山東方では、土師川と呼んで居ます。その岸邊をや、北にはなれて、みどりも深いこんもりとした、初夏になれば藤の花がふさ／＼とたれて、遠くからながめると、紫の雲のやうに美しく、天神の森が見えます。そのほとりに、丹州孝子芦田爲助と言ふ人が住んでゐました。それは、今から丁度三百年程昔のことでした。爲助の父は、爲家と言つてもとは、りつばな役人でしたが、おちぶれて家にはやぶれたむしろをしき、毎日の食物にもこまるといふほど

生地

時代
生家

孝心

の貧乏でした。爲助は、さういふ家の次男として生まれましたが、せんだんは、二葉よりかんばし」といつたとほり、小さい時から、非常に父



芦田爲助翁墓

母を大切にしていまして、決して、そのいひつけにそむくやうなことはありませんでした。爲助の家は、天田郡雀部村土師にありました。そのあたりの人は、往復一里の道を、福知山の町へ、買物に出かけて行くのでした。ある日のこと、爲助は町へ買物に行くことになりま

したがお父さんは、ざうりをはいてゆけ」といはれました。小さい子供のこ

のでせう。ところが、お母さんは、まだ道がかわいてゐないから下駄ををはいておいで」とおつしやいました。實際、此の地方は、べんたう忘れても傘忘れな」といふ程、天候のかはりやすいところですから、このお母さんの言葉も、きかねばなりません。爲助はしばらく考へてゐましたが、やがて意を決して、ざうりと、下駄とを片々にはいて出かけて行きました。兩親の心にそむかぬためには、それが、一番よい孝行な仕方であつたのです。何と感心な心がけてはありませんか。何にも知らない、村や町の人達は、爲助の足つきを見て道々で笑ひましたが、爲助はかまはずに、平氣でお使に參りました。何と言ふ信ずる所のあつたつといふるまひでせう。

冬温

爲助が大きくなつた時には、父も母も年をとつて、足の自由を失つてしまひました。爲助は、ますます、父母を大切に、心のかぎり孝行をつくしました。寒い夜には、自分のはだで、ねどこをあたまめ、父母を其の上によすませ、兩親のよくやすまれたのを見とどけて、自分

もやすみました。父母が夜中に、目をさまされた時には、その御きげんを、うかゞつて親の足を、わがふところに入れて、あたゝめました。かう言ふことは、毎夜二、三度もありました。

夏清

夏の暑い、照りつける日には、父母を、背中におうて、森にいつて、涼しい木かげをえらんで、すわらせ、其の白い髪を、自分ですいて、すゞしくしてあげました。夜、やすまれる時には、父母のふしどをあふいで暑さを去つておいてねかせました。どうかして、たべ物の足りない時には、自分は、じつところへて、父母にばかりすゝめ、まだたくさん残つて居ますと言つて、心配をかけるやうなことは、ありませんでした。よそで物をもらつた時には、喜んで持つてかへつて、まづ兩親にさし上げました。何と、美しい心がけては、ありませんか。

お母さんは、うまれつき、雷がきらひでした。それで爲助は、雷のなる時には、いつも母のそばをはなれたことはありません。他出して

論語

「父母在、不遠遊、必有方」

居ても、天地くらくには、か雨でも來はじめると、母の身を案じて、いそいで歸つてきました。

爲助は、かうして、父母に孝行をつくすひまには、田畑に出て、よくはたらきました。租税も、おくれたことは、一度もありません。たとへ、自分は、食へんでも、お上へたてまつるものは、決しておこたりませんでした。家の内では、孝子であり、君に對しては、忠良な臣民であつたのです。また、世間との交際も、親切で、義理がたく、他人から物を借りると言ふ事もありませんでした。爲助が此のやうにおだやかな人で、よく働らいて、まことに孝行者であつたので、村長はじめ、村の人たちは、皆、爲助に同情しました。

忠孝一本

婦道

その後、爲助は妻を迎へましたが、自分らは、家のすみに小屋をつくつてそこに住みました。それは、兩親の住居をさまたげないためでした。その妻も、また、爲助の行ひにならつて、よく兩親に仕へて、婦道

兩親の心を
喜ばせる

をつくしました。

父母が、よそに行きたいと思つた時には、爲助は、妻と二人で、兩親をおうて出て行きました。冬になつて、雪が積つて、道をとざしたときなどは、妻は、箒をとつて、先に立ち雪をはいて道をあけ、爲助は、親をせおつて後につゞきました。二人は兩親の心を喜ばせる事を、第一の樂しみとして居たのです。年のまはりで、不作な年や炎天つゞきの日でのりの時があります。世間の人たちはさういふ時には、よく不平をいつたりするものですが、爲助は決して不平をいつて兩親に心配をかけることなどはありません。「うちの田は水がかれはしません。畑も無事です。」今年も稲は、思つたより、よい出来ばえです。」といつて父母を喜ばせました。

追慕

此の爲助夫婦の、まごころからの孝養をうけて、兩親とも不自由な身でありながら、大それた長生をしまして、お母さんは、八十、お父さん

龜鑑

は、八十三で、なくなりました。が、爲助は、悲しくて、悲しくて、父母の死にあつて聲をあけて泣きました。かうして父母をしたふのあまり、家の近くに、墓をきつき、石塔を立て、毎日墓に参つて、香花をそなへ、忌日には、坊さんにお經を讀んでいたゞき、生きた人に仕へるやうにまごころをつくし、涙を落して、家に歸つて行きました。夕立が來て雷が、ゴロ／＼と鳴り響き、稲光がピカ／＼恐ろしさうにひらめくと、爲助は、いそいで、母の墓に参つて、傘をさしかけ墓石をかゝへ、まるで生前のやうに、これを守護しました。何といふ孝心の極みでせう。

かうして爲助の孝行は、村の人たちは皆知らない者はありません。隣村の人々も傳へ聞いて、誰一人褒めないものはありません。たうとう福知山城においてになつたお殿様のお耳に入りました。お殿様は松平主殿頭忠房と申されます。主殿頭様はそこで、その孝行に感じて、わざ／＼、お城に呼んで、おほめの黄金をたまはりました。爲

推讓

助は、ありがたく、いたゞいて、かへつて来て、兄にわたしました。兄は、「これは、お前が孝行をして、もらつたものだ。私のもらふはずのものではない。」と言つて受取りません。そこでいつまでも兄弟でゆづりあつて、とらないので、そのまゝ家にしまつておきました。

お殿様はその事をお聞になつて、これはめづらしい感心なことだ。と言ふので、爲助の租税をゆるされました。

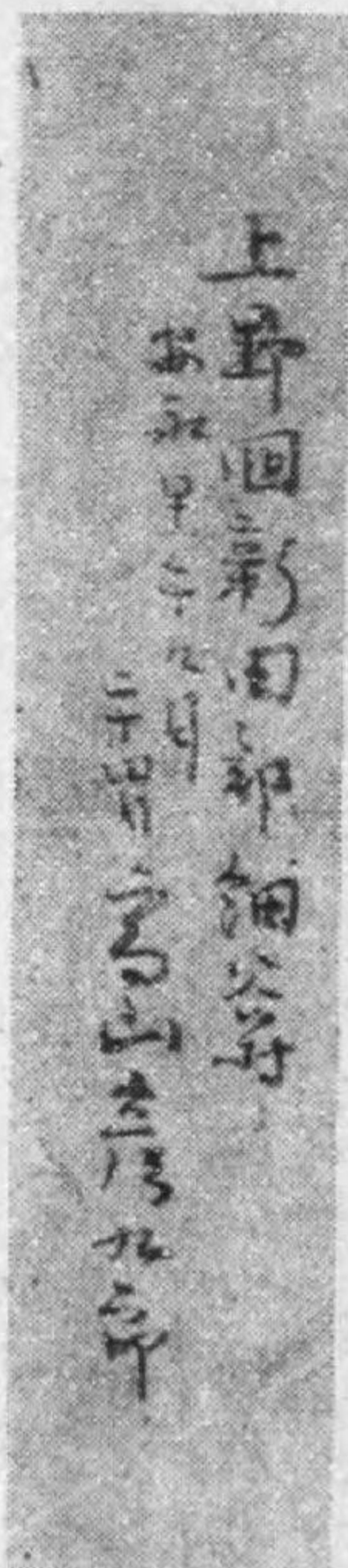
お殿様は江戸にお出でになつて、この感心な孝行者の話を書きました。それをきいて、林春齋と言ふ、當時の大學者が、筆を取つて書いたのが、今に孝子の家へのこつて居る、丹州孝子傳と言ふ巻物です。孝子爲助の墓は天神森の北、福知山中學校の西にあります。

墓地
遺芳

有名な高山彦九郎と言ふ忠臣は、爲助の孝行に感じて、わざゞこゝをたづねました。今もその時の彦九郎の名刺が残つて居ます。その後、此の孝行者の事を、廣く世に知らせたいといふので、天神森の

眞心

南に、大きな石碑が建てられました。その表の「孝子芦田爲助之碑」と



高山彦九郎名刺

いふ文字は、伏見宮様がお書きになつたものです。歴代の京都府知事の方

々も皆こゝに展墓をなさいました。池松元知事、池田元知事、また以前の知事大森鐘一男爵のごときはわざゞ夫婦伴つて展墓せられ、いろ／＼事蹟の調査をなさいました。

あゝ、孝子爲助がなくなつてから、今年で丁度二百六十六年になります。さうしてその孝行の徳は、よい香がいつまでも、こつてゆくやうに、いつの世の人々をも、感心させないではおきません。それはつまり、孝子爲助の孝行がまごころから出たものであつたからであります。この感心な孝行な人の出た地方に住んで居る私どもはこ

とに心がけをよくして、よく忠によく孝に、どこまでも立派な人にならねばなりません。

二、蘭學者朽木昌綱

福知山城主八代朽木昌綱は、六代綱貞の子、桃園天皇の寛延三年正月二十七日出生。幼名斧次郎、後、左門と稱す。光格天皇の安永九年三十一歳にて隱岐守に殺し、天明七年三十八歳にして襲封、寛政六年四十五歳のとき近江守に殺し、寛政十二年五十一歳にして家を九代倫綱に譲り剃髪して近江入道と稱す。享和二年四月十七日卒去、年五十三。

昌綱は江戸時代蘭學勃興期の一偉材にして、その方面に於ける功績の大略は之を本文に於てやや詳にしたるが、尙ほ彼は趣味の人として畫をよくし、茶道にあつては松平不昧の高弟として夙に一家を爲せり。

別に泉貨の蒐集研究に於ては江戸時代を通じて第一流の大家たるを失はず。その方面の著述の主なるものに、新撰錢譜、増補改正孔方圖鑑、増補改正珍貨孔方圖鑑、西洋錢譜、彩雲堂藏泉目錄、泉貨分量考、弄泉奇鑑、和漢古今泉貨鑑あり。

明和八年の春三月五日のことであつた。その前日千住小塚原で刑屍の腑分を見て、漢説の杜撰、西説の精確なのに驚き、憤を發した中津藩醫前野良澤、小濱藩醫杉田玄白、同中川淳庵の三人が、良澤宅に會合してキユルムスの解剖書所謂ターフル・アナトミアの翻譯にとりかかつたのは。蘭學事始に、この日のことを記して、彼ターフル・アナトミアの書にうち向ひしに、誠に艱難なき船の大海に乗出せしが如く、茫洋として寄べきなく、只あきれにあきれ居たる迄なり。」とあるのは無理もないことであつた。盟主とも先生とも仰がれてゐた良澤の語學力は、僅かに蘭語數百言を知つてゐたに過ぎず、玄白の如

き、蘭語のイロハさへ知らなかつたのである。然し彼等は屈しなかつた。この解剖書を翻譯して世に弘めることは、やがて人體についての精確な知識を世の醫家に與へることである。それは又世の病める幾百千の人々の生命を救ふことでもある。すめら御國の爲に身を粉に碎いても、この事なし遂げずには置くものかと、盛りの花もよそに、彼等は日を定めての會合には來る日來る日も沈思默考、ターフル・アナトミアを睨み詰めてゐたのであつた。その頃のことを蘭學事始には、前後一向にわからぬ事ばかりなり。例へば、眉といふものは目の上に生じたる毛なりと有るやうなる一句、彷彿として、長き日の春の一日には明らめられず。日暮る迄考へ詰め、互ににらみ合て、僅か一二寸の文章、一行も解し得る事ならぬことにて有りしなり。」と記してある。昔的、戸田、宿禰が、高麗から貢つた鐵的を美事に射通したためしもある。日本男子が、御國の爲にと眞心こめてする事

に、成就せぬことがあらうや。辭書はなく良師はなくとも、良澤らには至誠があつた。至誠は神に通じる。彼等の難事業もやがて漸くはかどるやうになつて、着手してから三年後の安永三年八月には、この業全く成り「解體新書」と名づけて刊行せられることとなつたのである。

良澤等の會合は、間もなく世間に知れ渡り、これに來り加はるもの日を追うて増して來た。幕府の醫官桂川甫周・一橋家醫官石川玄常・高崎藩醫嶺春泰・庄内藩醫鳥山松園・弘前藩醫桐山正哲等がそれであるが、これらの醫師達の間に加つて一異彩を放つてゐたのは實にわが朽木昌綱であつた。

昌綱は安永元年二十三歳の若冠を以てこの社中に參加したやうである。彼の參加は、一時の好奇心や氣まぐれから出たのではない。深く當世の事を憂へ、心に決するところがあつたからであつた。こ

れより前に彼は國史を讀んで、よくその核心を把握してゐた。次に彼の史觀の大略を述べよう。

我等の祖先は支那から學ぶところが多かつたが、しかも支那の文化に酔ひしれて己を忘れるやうなことは無かつた。否、支那に學び、支那を知れば知るほど、人皆は尊嚴無比の御國の姿に限無い誇を深めて行つたのである。神ながらの國日本、その尊くも美しい國柄と比べて見れば郁々たる文化を誇る支那とても亦一箇の蠻夷に外ならぬとした。支那文化を最もよくとり入れてゐた奈良朝、平安朝の初期に於てさへ、舍人親王は、日本紀編著に當つて支那を夷とし、萬多親王は新撰姓氏錄に於て支那人の子孫はこれを蕃別とし給うたのである。これが實にわが古俗であつた。又、他國の文化に對しては、透徹した批判の下に、苟くも日本文化の躍進と醇化とに役立ち得るものならば、いづこの文化にもあれ、快くとり入れたのである。甲國

の文化にはひたすら眩惑してその利弊を分たず、乙國の文化には強ひて眼を塞いで入れまいとするやうな偏執と狹量とは、我等の祖先のことでは無かつた。これ、我國に儒佛並び存する所以である。

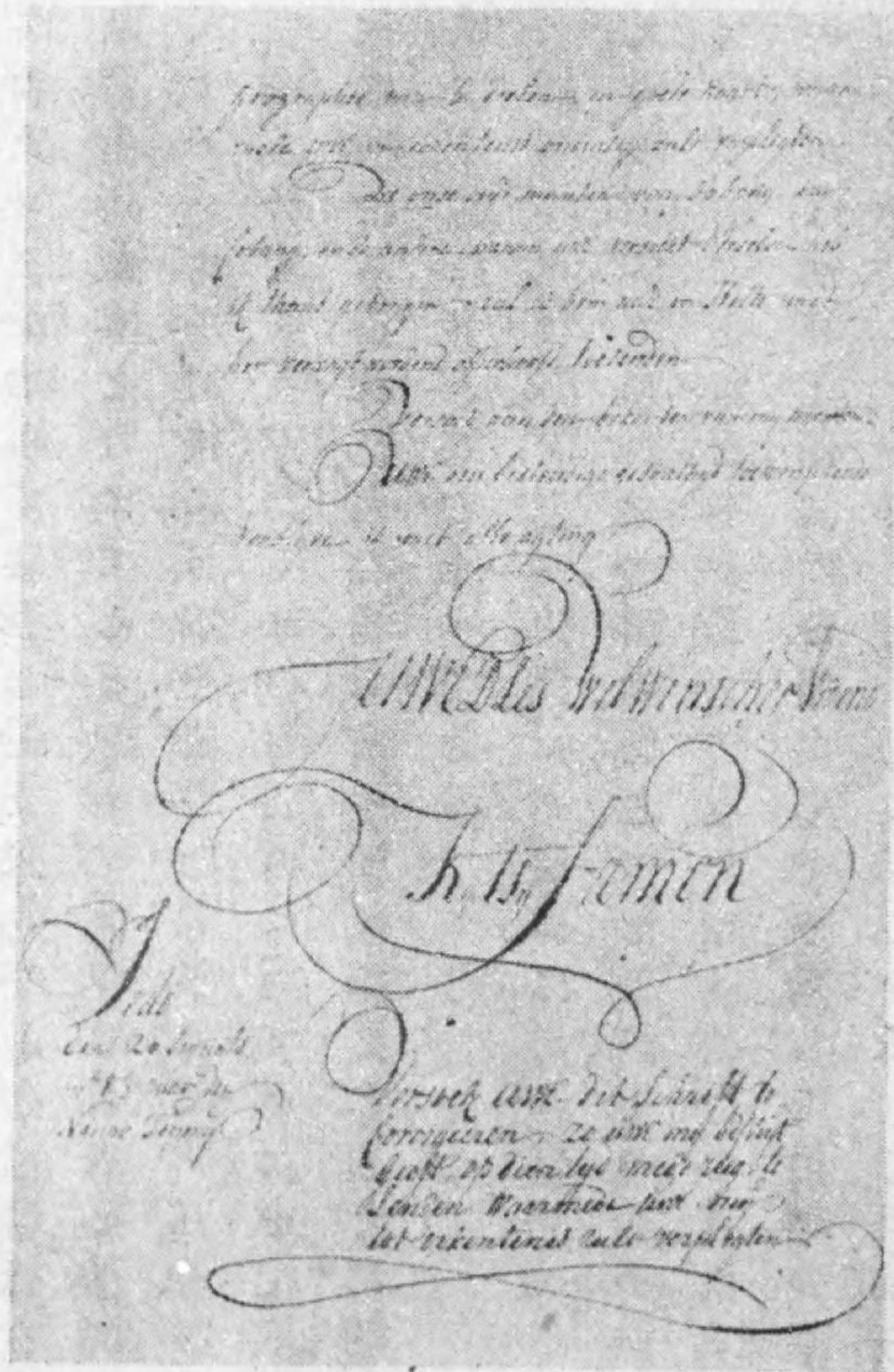
右のやうな史觀に立つ昌綱が、その當時の世の有様を見て、いかに憤ろしいことが多かつたかは想像に餘りがある。中にも、支那を以て中國となし、支那以外には國なしと盲目的に之を崇拜するものなほ跡を絶たぬことは、彼には特に堪へ難い憂であつた。この病弊の根源の一つには我國人の世界についての知識の缺如がある。よし、難事ではあるが、自ら起つて諸外國の地理を明にし、以て世人を啓發して皇恩の萬分の一にもお報いしよう。かく思ひ定めて、漢文の地理書を涉獵し始めたのは昌綱の二十歳未滿の頃であつた。然し、間もなく行詰りが來たのである。西洋の事は直接西洋の圖書によらねば徹することができぬと知つては、今は漢文の地理書は手にとる

も懈く、如何にもして蘭語の學修をせばやと惱み始めたのであつた。かかる程に、やがて良澤らの會合を耳にし、遂に意を決してその社中に投ずることとなつたのである。

良澤を師と仰ぐその社中の人々は、いづれも皆天下の俊材であつた。然し、何と云うても蘭學草創當時のこと、彼等が如何に思を凝らし精を傾けても、なほ解き難き疑義は少くは無かつたのである。そのやうな疑義は和蘭人の春の參府を待ち受けて問ひ晴らすが常であつたが、わが昌綱が就いて益を受けること最も大であつた蘭人はイサーク・チチングであつた。

このチチングと昌綱とは互に師友として請益し合うてゐたのである。チチングは昌綱の西洋研究に、昌綱はチチングの日本研究に、それ〴〵或は材料を與へ、或は質疑に答へ、よその見る目も羨しきまでに睦じく助け合うた。この交情は、チチングが日本を去つてから

天明五年四月二十日日附のもの、後半の内容は書籍、貨幣の惠與を謝し、重ねて各國の貨幣、辭書、地理書等の購入を依頼してゐる。次頁參照、原本は京都大學所藏



昌綱侯よりチチングに宛てた書簡

も尙ほ書信の往復によつてつづけられたのである。當時は今日とは違うて文献の蒐集は極めて困難であつたから、昌綱の地理學にとつて、このチチングの存在が、どれほど便利なものであつたかは容易に想像することができよう。例へ

ばチチングが始めて参府した安永九年の冬には、彼は、現在石川縣立圖書館所藏本となつてゐるサンソンの地圖帖を昌綱に贈つてゐる。又、チチングが最後に日本を去つた翌年の天明五年四月二十日附チチング宛昌綱の書簡には、魯西亞國に關する記事文正に拜受致候中略、地理書六卷及び大形地圖來年度にてよろしく候間御届け被下候はば幸甚に存上候と述べてある。

昌綱の地理學研究はチチングを得てから、本格的に進んで行つた。天明四年には泰西輿地圖說卷之一を脱稿、その五年後の寛政元年に至つて、十七卷六冊本の泰西輿地圖說の刊行を見ることとなつた。いそがば廻れと、蘭語の征服からやり直した昌綱の不屈不撓の研究は遂にかぐはしい實を結んだのである。立志以來歲月を新にすること二十餘。この年昌綱四十歳、鬢髮既に白きを交へてゐた。

泰西輿地圖說はヨウロッパの地誌で、當時我國に舶載せられてゐ

たヒュブネルの地理書、プレヴォの全世界旅行記集成は勿論、其他の蘭冊數十編を校考取捨してまとめ上げたものである。當時の學者は本を書くには漢文を用ひるのが常であつたが、この本は珍らしくも全部假名交り文で、誰にも容易に理解し得るやう書いてある。誰れにも分るやうにと、細心の注意を拂うたところに昌綱の用意があるのである。この書に先立つ七十七年の正徳二年に出た新井白石の采覽異言はあつても、世人の多くはなほ「和蘭人は天質跟なし」とか「彼人尿するに臨んで片足をあぐる」とか「和蘭人の如し」とか、とりとめも無いことを考へてゐたのである。もとより西洋の地理を知るものゝ如きは曉の星よりも少かつた。そこに表はれた昌綱の讀み易い、精しい地理書が如何に當代を裨益したかは多言を要せぬであらう。語學者としての昌綱は當代第一流の人物であつた。殊に、蘭文を作ることに於ては、當時彼の右に出づるものは無かつたのである。

その頃の學者は多くは和解に力を用ひて作文を願ふことは少かつたが、昌綱は異例で、チチングや其他の外人に書を送るに當つては、多くは「本書簡は御添削の上で御返送下されたい」と申添へて居り、作文の研究は多年に亙つてつづけられてゐるのを見るのである。なほ、昌綱の語學の研究は、少くとも天明五年(昌綱三十六歳)にはラテン語、ドイツ語、フランス語にまで擴げられたやうである。それらの語學力の程度は今知るよしも無いが、少くともフランス語は少しは讀めたと認めてよいものがある。實に昌綱は我が國に於けるフランス語研究者の先驅であつた。

昌綱は、蘭學者として世に喧傳せられてゐる人では無い。しかし、彼は上に述べたやうに實に卓絶した蘭學者であつたし、又他面から見れば、比類少い蘭學の保護者であつた。前野・杉田・中川等によつて基を堅うした江戸の蘭學が日本の蘭學となるのは實に昌綱の後輩

大槻玄澤の出現によるのであるが、その玄澤の逸材たるを認めて、早くこれを我邸に出入せしめ愛護激勵遂に大成せしめたのは、わが昌綱であつた。天明五年から六年にかけての玄澤の長崎遊學に當つて、その遊學資金を提供し、又一方長崎出島の蘭人に書を與へて玄澤の修學についての周旋を依頼したことや、その後天明八年に至つて、玄澤の名を藉甚たらしめたその名著蘭學階梯の上木費用を負擔してそれを刊行せしめたことや、すべて昌綱の蘭學についての深い理解と、玄澤に對する強い愛情とを示すものである。又、昌綱の師前野良澤が著した輿地圖編の原本は上に記したサンソン地圖帖で、昌綱が借し與へたものであつた。實に昌綱は、我身になし能ふ限りの援助を當時の蘭學者達に與へてゐたのである。思へば勃興期のわが蘭學界に昌綱の存在してゐたことは我國の幸福であつた。明治以後の日本の科學が忽然として明治以後に表はれたものでないこと

を知る人は、昌綱に感謝するに吝であつてはならぬ。又、すめら御國の發展になにか寄與せむと欲する者は、國家の爲に必要なりと見るや、敢然自ら進んで蘭學草創の難業に参加した昌綱の氣概と、やり出した以上遂げねばおかぬとするその大勇猛心に學ぶところが無ければならぬ。

三、滴水禪師

滴水禪師は嵯峨の嵐山に近き名刹天龍寺、また修學院の門跡林丘寺を中興し、三度管長となつた傑僧で、父は上田彦兵衛、母は絹、文政五年四月八日、山又山の丹波國何鹿郡白道路村（はくさじ）に生れた。不幸四歳にして父を喪ひ、由里清左衛門家に引取られた。しかしその養家にも長くゐたのではない。亡父の遺言もあつて、九歳の時加佐郡行永村の龍勝寺に小僧にやられ、ここにその出家生活が始つ

たのである。が、薄倖な兒宜牧得度して得た名は、やがて授業師よりも檀中の者があいそをつかさ腕白の爲め、いつそのこと首くくつてしまはうかと思ひ詰める窮境にたち至つた。たまたま慰め勵ます



滴水禪師肖像

知己があつて、よし、おれも男一匹、修行に出て功成り名遂げた曉には堂々綱代の籠に乗つて歸山して見せるぞと、悲壯な決心をしてその寺を出たのが十六七歳の頃。十九の年には遙々備前國の曹源寺に紫衣を賜はつた名僧儀山禪師の許へ拾ひ草鞋で訪ねて行つた。

とはいへ、一介の雲水がさう簡単に一代の高僧のお目にかかれる

ものではなく、修行の衆は多いし、一旦断はられたのである。しかし、宜牧は、もともと堅い決心で出て来た者故、お許しあるまでは此處を動きませんと言つて、そのまま庭に坐り込んでしまつた。見るに見かねて握飯をこつそり與へる僧もあつたが時に驟雨が來ても濡れるに委せた。その不退轉の勇猛心に、つひに老師に相見しやけんを許されたのであるが、禪門の習ひで初めてお目にかかるには相見香とて線香を必要とするのであるが、それを求める一錢の金も無く、持つてゐた墨斗ぼくたうを賣つてその資に充てたといふ。

その寺で苦修精鍊すること十年、遂に宗旨の蘊奥を極めたのである。

或時、風呂番に當つた滴水は、師の儀山和尚が熱いから水をくれと申されたので、何氣なく手桶の底にあつた水を捨てた。その刹那、こらつ、なんとといふ勿體無いことをするか。」と、老師は大喝一聲した。

「僅か一滴の水と雖もこれを粗末にするは修業者としてあるまじきこと。第一、修業者は殺生を慎め。殺生とは必ずしも物の生命を取るの謂に非ず。一滴の水、一分の時間を無駄にすること、これ即ち殺生なり。一滴の水も草木にかければ生き、溝に捨てれば死ぬ。夏の時分だ。木にかけてやれ。昔、支那に洞山大師といふ高僧があつた。三人の修業者がその徳を慕つて訪ねて行く途中、溪流に菜つ葉が流れて來たのを見て、河中に菜つ葉を棄てる位の人物なら師匠と仰ぐに足らずと將に引返さんとしたところが、一枚の菜つ葉を追ひかけて來た者がある。見れば洞山大師であつたので、その後を追うてお目にかかつて教を請うたと言ふ話もある。」と、懇々、風呂の中から垂誠された。これが滴水の骨身に徹した。また滴水といふ名を付けられた所以でもある。

この事は一生を通じて禪師の指針となつたので、その遺偈にも

曹源一滴。七十餘年。受用不盡。蓋地蓋天。咄。勉旃々々。
とある。この意味は深遠であるが、現在、天龍寺に法燈を嗣いで居られる關精拙師が嘗て本校で大意を分りやすく説かれたところに據ると——一滴の水を七十八年間費つても費つて費ひ切れなかつた。之は自分の一生を通じての精神上の寶であつた。明けても暮れても如何なる處にても用ひた寶であつた。曹源の一滴水と言ふのは天龍寺の裏の池は曹源池と言ふ。又支那に曹溪山がある。修業された寺が曹源寺、それで曹源の一滴である。これが判れば滴水禪師の境地が開けて來よう。

さて、嚴師としての行藏は世を絶し、徳風の及ぶところ高く廣き滴水禪師は、古への役の行者にも比せられるに至つたが、その門下には英豪輩出した。曰く、龍淵、峩山、龍水、東昱、愚庵等禪門の名流。曰く、山岡鐵舟、鳥尾得庵、根津一、北垣國道、三遊亭圓朝等の居士連。中でも、鐵

舟は明治維新の大立者、西郷隆盛と江戸城開渡しの談判は國史に不滅の成跡をのこしてあるが、劍道は無刀流の始祖で有名である。

鐵舟がこの流を産み出すに至つたのは滴水禪師の薰化に依ると言はれ、その修行たるや實に眞劍であつた。與へられた公案、兼中至を考へ抜いて三ヶ年、其間、食事中であらうと、一服の折であらうと、はたまた晝夜の別も無かつたので、夫人は鐵舟が發狂したのではないかと心配したといふ。その工夫三昧は功を奏してつひに大悟徹底するに至つたのであるが、滴水禪師もその指導にあたつては一回一回生命がけであつたといふ。

惡辣手段を以て鳴る嚴師は一室に鐵舟と相對して、時には怒鳴る、毆る、蹴るといつた有様に、次室に控へてゐた鐵舟門下の劍客達は切齒扼腕したが入つて行くことも許されず、村上政五郎の如きは、この惡坊主奴、師匠の敵、一刀兩斷にしてくれんとはかり、三日の間禪師に

尾行をしたほどであつた。

また鐵眼の名でも知られる愚庵和尚は近代禪林の逸足で風流超脱、その漢詩や和歌——ことに和歌は餘りにも有名で、先年歌碑が建てられ、良寛上人と並び稱せられる。近年その研究熱は學者間に昂まつて行く。

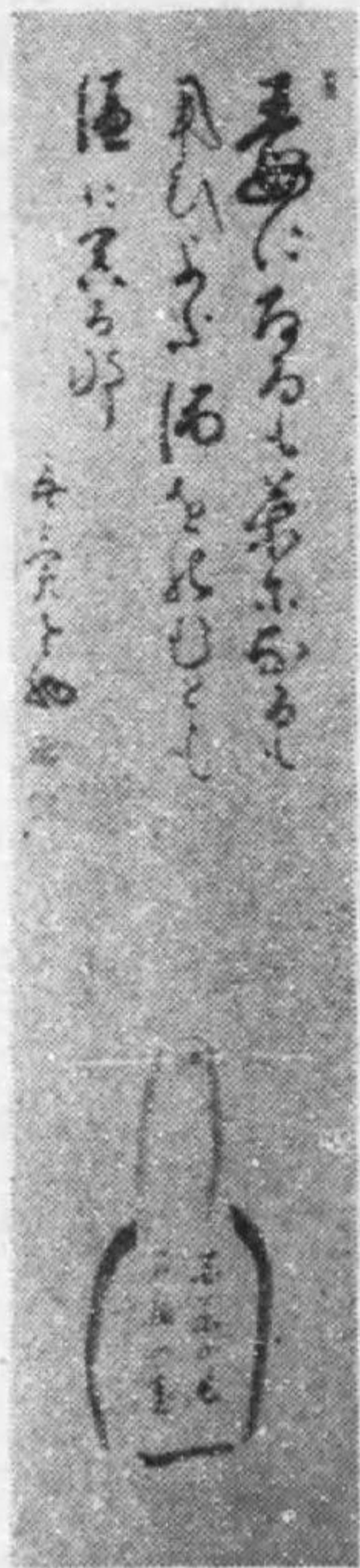
話は前へ戻る。元治元年、時に滴水禪師四十三歳にしてかの蛤御門の變があつた。攘夷親征論の沸騰する内外多事多難の頃であつた。夏七月の十八日、長州勢は戦利あらず潰走したのであるが、追うて天龍寺に現れたのは薩軍二百餘名、これに將たるは村田新八、大砲數門を同寺の總門の前に並べて、一令の下に焼却せんとした。

すでに寺内の大衆も難を避けて一人もゐなかつたのであるが、残つてゐた滴水禪師は、單身、これに駆けつけて隊長村田新八の面前に立つた。

毒になるも藥
になるも用ひ
よふ酒をのむ
とも酒に呑る
な

百藥の長
万病の基
無異老衲

「長州の兵はもうとうに逃げてしまつて山内には只の一人も居りませぬ。貴方は何を撃たれるのですか。もし一度でも長兵の宿となつたらこの寺が憎いのですか。そしてそれを焚き拂はうとなさるのですか。これは由緒のある寺、無闇に焼くべきではありません。焼くなら先づこのわたしを粉齏してから後のことにして下さい。」



滴水禪師書

身に寸鐵も帶び
ずしてこの氣魄、こ
の度胸に、流石の荒
武者も機先を挫か

れて、

「賊が居らねば焼き拂ふ必要もない。何も寺に恨みはないが、軍例によつて一度進んだ以上、敵營に對し一發も放たずに退くことは出来ぬ。故に空砲を一二發放つことにしようから御安心なさい。」と、

應へた。

そこで滴水禪師も安心して引返したのであるが、何ぞ知らん、空に轟く砲聲數發、忽ち黒煙濛濛として寺内に立ちこもり、紅蓮の焰は歴史的なこの伽藍を甜め盡してしまつた。愕き憤ると雖もせんすべもなく、滴水禪師は直ちに祖堂に馳せ入つて、渦巻く猛煙の中から開山夢窓國師の木像を擔ぎ出して竹林の中へ這れたのであつた。

その後四年、皇政復古し、輝かしき明治の大御代となつたが、明治二年、懇請もだし難く、滴水禪師は丹後の龍勝寺へ授戒に赴くことになつた。その昔、得度し受業十年、最後に叩き出され殆んど三十年の歲月は経過してゐた。禪師の聲名はすでに隆隆たるもので、烈烈たる夏の下、遙々と網代の駕で歸山したのであつた。

これを迎へて誰よりも喜んだのは、昔馴染の山本治右衛門で、この人こそ悲壯な決心で寺を後にする在りし日の宜牧を激勵したので

あつたから、

「宜牧はん、よう歸れアはつたなア。立派になつて……」と、涙ながらにその手を取つた。

瑞雲、郷里舊同盟。盤坐草堂風月清。蕩子何愁不成道。村翁任喚昔時名。

この述懐をもつた滴水禪師の胸中、そも如何なものであつたらう。

其後も、歸山のことがあり、二週間位も滞在して舊知の人達と昔語りをし、また檀中に向つては當時の懺悔話があつたが、その時一座の人人泣かぬ者は無かつたと言ふ。

明治四年始めて滴水禪師は天龍寺の管長となつた。世は擧げて廢佛毀釋の風が漲つてをり、藩籍奉還の大變動に寺社領は失はれたのであるから、例の薩兵の暴擧で堂宇は灰燼に歸してしまつてゐた

し、官令畏く住持職とはなつたが、廢寺同然であつた。滴水禪師には深い覺悟と烈しい弘法くわうぼうの精神がなければならなかつた。

そして寺院の勸進は維新後國法に依つて禁じられてゐたのを、許され、あまつさへ兩陛下より御下賜金まであつて、名利再建の基本は立つた。それには鐵舟、得庵等が大いに奔走し、また龍淵、峩山兩和尚内より助け、明治三十一年に現在の本堂庫裡が竣工したのである。その龍淵和尚は當福知山市高木家の出身であり、後を襲うて天龍寺の管長となつたが、更にその後台岳和尚また中上林の産で、丹波は相嗣いで三人の管長を出してゐるのである。

男兒一度志を立てて郷關を出たなら、成功を見ずんば死すとも歸らぬ。それが功成り名遂げての歸山は、そも何に因るのであるか。その時用ひられた網代の駕、それは今も東舞鶴市在の龍勝寺の寺寶として珍藏され、觀る人に無言の教訓を與へてゐるのである。

四、眞下飛泉

(一)

こゝはお國を何百里
離れてとほき滿洲の
赤い夕日にてらされて
友は野末の石の下

こんな風に始つてゐる「戰友」や
父上母上いざさらば
わたしはいくさに行きます
隣ごなりに居つた馬さへも
徴發されて行つたのに

わたしは人と生れきて
 而かも男子とあるものが
 お國の爲めの御奉公は
 いつであらうと待つうちに
 昨日とどいた赤だすき
 かけて勇んで行きます



眞下飛泉肖像

を以て始まつてゐる「出征」と題する軍歌、これ位廣く、永くすたれずに唄はれた軍歌は、これまで、さう澤山はないであらう。而もこれらの作者、眞下飛泉こそはこの地方が生んだ眞に偉い小學校訓導であつた。

福知山驛から北丹鐵道で由良川邊りを凡そ半時間、終點の河守驛で下車する。元伊勢詣での老若男女や、大江山登山の若者が屹度通

る細長い田舎町の河守は實に飛泉の郷里である。

明治十一年十月生れて名は瀧吉。餘り裕かでない農家に生れた彼は、尋常小學校卒業後二年間その町の糸問屋に奉公した。が幼ない頃から繪畫や文章を好み、殊に綴方の上手なことは何時も受持の先生を驚かした。かくの如く豊かな天分を持つた飛泉は、勉學の念に燃えて高等小學校へ入學し、卒業後直ちに准教員講習を終へ郷里の町に近い小學校に奉職した。併し更に立派な教員になりたいとの志止み難く、十八歳の春、京都府師範學校に入學した。在學中は一生涯懸命、勉學に努めたことは云ふ迄もないが、幼時から好んだ文學方面の才能は益々生長して、自ら創作を試みて、文藝雜誌に発表したり、新聞の懸賞小説に應募當選したりした。一方理化學や手工に深い興味を覺えて殊に工學的發明といつたこと、心に心を傾けたことは、世の所謂文學青年とは異るところであつた。

卒業後直ちに京都市内の小學校に勤めたが、二十六歳の時選ばれて母校の附屬小學校訓導となり、明治四十三年には、三十三歳の若さで京都市内修道小學校の校長となつて、學校の増改築に力を注ぐと共に教育上の研究を怠らなかつた。居ること數年、大正六年に尙徳小學校に轉じ、この年多年教育に盡した功勞に依つて文部大臣から表彰せられた。それを記念するため月刊雜誌「兒童本位」を發行して、教育上の諸研究を載せ、かくて數年間はこの雜誌の社説をも執筆した。大正十二年、成逸小學校長になつた時、教育界廓清のため、正々堂々の意見を陳べて、初等教育界を勇退した。次いで翌年、東山中學校教諭となつたが、大正十四年には最高點で京都市會議員に當選した。その間に大阪毎日新聞の童謡審査委員や、毎日歌壇の選者となつたこともある。議員としては、市政の淨化を高唱し、殊に市教育の振興のために盡瘁したが、大正十五年七月、心臟病に喘息を併發し、遂にそ

の年十月京都府立病院で惜しくも永眠した。年四十九。

篝火今や消えんとするが如くグロキシニヤは
萎れたりけり

は彼の遺詠である。

昭和二年十月、西川百子氏篇「飛泉抄」が出来上つた。此の年十一月三日、明治天皇御誕辰の佳節を卜し、その遺徳を慕ふ、江湖の有志集まつて「戦友」の歌碑を京都市内知恩院境内に建立した。碑面の「ここはお國を何百里」の文字は「肉弾」「銃後」の著者櫻井忠温少將の揮毫である。碑の裏面には「戦友」の歌を通じて眞下飛泉氏を追慕するもの一千八百二十四名建之昭和二年十一月三日」とある。

更に昭和九年十月十八日には郷里河守町の出身小學校に記功碑が建てられた。碑の歌詞は荒木貞夫大將の書である。

(二)

飛泉は非常に多方面に活動してゐるが、それは大體教育家としての活動と、詩人としてのそれとに分けて考へられる。

詩人としての素質が最も著しく發揮されたのは何といつても、日本中の少年少女が誰も知らぬもののない軍歌、こゝはお國や、父上母上いざさらば等の作られた、明治三十七八年戦役の頃であらう。

當時飛泉は二十七、八歳の青年で、附屬訓導であつた。それらの軍歌は、日露戦争の際彼が、皇國に對する至誠の一端として作つたのであつたが、あれだけの名聲を博するやうになるまでには彼の少年時代から詩文に對する並々ならぬ努力精進があつたことを忘れてはならぬ。而も當時彼が物した軍歌だけでも、凡そ五十位もあることを思ふと、寧ろその努力のすばらしいことに驚嘆するばかりである。その中、世の中にもてはやされるに至つた歌の中には出征してゐた、飛泉の義兄が負傷のため、内地へ歸還して、戦地の實狀を詳しく

飛泉に物語つたのにヒントを得たものが多い。

これらの軍歌は今日の進んだ世から見ると多少幼稚の感じのするところもないではないが、その頃としては實に清新の氣の溢れたものであつた。飛泉を永く兄のやうに敬慕してゐた文人相馬御風は飛泉の軍歌に就いて

用語に於て口語を主とした點、こどもには何の事やら解らぬやうなむづかしい言葉を用ひた軍歌の多かつた中であつてどんなこどもにでもわかるやうな、むしろ兒童本位に歌つてある點、少くともそれらの點に於て、彼の軍歌はたしかにわが國の軍歌に一大革新を與へたと云ふべきである。

と述べてゐるし、詩人河井醉茗は
當時東京の詩界は有明氏、泣菫氏などの象徴詩がもて囃されて時に口語の民衆的詩風を試みたのは確かに破天荒の企圖であつた。

日本近代詩の發達上、眞下飛泉氏の如きは陰れたる功勞者として逸することは出来ないのである。

といつてゐる。要するに文學史上から見ると眞下飛泉は明治四十年頃から起つてその後今日まで、益々盛んになつて來た口語詩の基を始めた人と云つてよいのである。

これらの軍歌が抒情味の籠つた何となく新らしみのあるものとして全國の人々に喜ばれたことは申すまでもないが、それに深い感動を覺えた兼常清佐博士が

私が中學校の上級のころに「こゝはお國を何百里」のバラッドが出来た。私はこれには感心した。ふしが素朴で、文句が平易で、そして一脈の哀愁が曲の全面ににじみ出てゐる。誠に名曲である。……

と云つてゐることを想つても、それが當時の人々に如何に歡迎され

たかを想像出來よう。

滿洲事變、引續いての支那事變始まつて以來軍歌氾濫の世の中となつたが、それらの軍歌や歌謠に實に多數の「戰友調」あるひは「眞下式」とも云ふべき調子のあることを思ふと、今更乍ら飛泉の影響が如何に大きいかに驚嘆するのである。

又、飛泉の作つた數多の新體詩の中では、明治四十二年九月作家といふのも逸することは出来ない。これは當時尋常五學年の讀本に採用せられて、全國の小學生に朗唱されたものである。それは

人は皆、静まりいねし

ま夜中に家組立つる

木々は今、語り出しぬ

「我は元、木曾の檜よ

白雪をうなじにまきて

峰高く空にそびえき」

「我は元、丹波の松よ

山こむる霞を後に

いかだして都に來けり。」

で始まつてゐて、今の言葉で云へば「共存共榮」といふことを寓したものである。これを今の四十歳前後の人達が小學生であつた頃、教室で聲を張り上げて暗誦したのであつた。又飛泉が作つた童話の中では、月のお宮といふのが少年世界の懸賞募集に應じて多數の中から入賞し、後には京都の立派な劇場で上演せられた。

彼は又若い頃から與謝野鐵幹等と共に歌道革新のために盡くしたが、その自ら物した歌の中、

北の支那にまな子をやりし
老いし樵夫我にニユースを
日毎聞きにくる

は、こゝはお國の作者には相應はしいものであり、新萬葉集改造社版にも収録されてゐる。

生來非常に孝心が深く、殊に母思ひであつたから、それが自然に和歌となつて流れ出たものが多い。

橋立の文殊に暮れて御詠歌の母の背による

小さき子なりし

日毎日毎子に幸あれの母の上に神の御瞳

われ疑はず

ふるさとの母をおもへばおのづから心和みて

長閑に樂しき

これらは皆母思ひの彼の真情の發露であり、而も涙ぐましいまでの感激をじつところへて詠まれたものである。かうした飛泉がその後の半生を都市の騒音と塵埃の中に暮しながら、常に天上の星を仰

ぎ、直ちに郷里の田園や丹波の山々に想ひを馳せたのは何の不思議もない。

山多き丹波の國の朝霧は物を思ひて行くによきかな

は栗と共に昔からこの地方の名物である霧の情趣を巧みに捕へたものである。

またこの地方の人々が何時までも忘れ得ぬ軍歌「仰げや歩兵第二十」も飛泉の作といはれてゐる。

實に飛泉の義弟東郷實博士が云つたやうに、眞下飛泉は死んだ。

併し彼の藝術的作品は國家の生命と共に永久不滅である。」



河守國民學校にある飛泉の記功碑

飛泉は文藝上に澤山の偉い知己があつた。それらの人々と共に、關西地方に文藝を普及し、詩文愛好の念をうゑつけることに努力した飛泉の功績は大きい。それに關聯して生じた個人的親交では相馬御風とのそれは生涯誠に美しい限りであつた。御風を初めて文壇に紹介したのは實に飛泉であつた。されば御風は飛泉追悼の文中、

田舎出の、少しばかり文學かぶれをした、小生意氣な青年であつた私を一見まるで親身の弟かなどのやうにかあいがつてくださつて、痒いところへ手のとくやうな指導と鞭撻とを與へてくださったのは眞下さんであつた。……一人息子として育てられて来た私に、生れて始めて兄らしい愛を感じさせて貰つたあの頃の眞下さんを、永久に慕はずにゐられない。と書いてゐる。

(三)

かう云ふやうに飛泉は文藝の方面に非常な才能を發揮したが、併しその本領はどこ迄も教育家としてであり、而も小學校訓導としてであつた。彼程小學校訓導たることに無限の感謝と満足と誇とを感じつつ、宛も百姓が人間の生命の糧を育生するやうに、青少年を世話し、育て、世の中にこれ程善良な仕事はないとの確信に燃えてゐた者は稀である。殊にその文藝的天分と、教育的熱意とがびつたりと融合して、力強い、永續的な感化をその教へ子に及ぼした點に於て、彼の教育は誠に偉大であつた。國語、殊に綴方、韻文教授の研究の深いこと、その教授法の優れてゐたことは全國に名聲を博してゐた。その研究が文部省で讀本改訂の際參考になつたこともあつた。又童謡や童話を教育上に採入れるといふことに於て彼は全國の教員に先んじてゐた。その後小學校に於けるこの方面のすばらしい發達

は彼に負ふところが多い。一方理科教育にも常に細心の注意と研究を怠らなかつた。それらの忙しい仕事の餘暇を利用して、教育雜誌を編輯し、その研究を發表したり、教室裝飾に關する立派な著書を公けにしたりした。

願ふに彼の教育理念の根本となつたものは年と共に生長して止まない博大な教育愛と一生涯孜々として勵んだ勉學とであつた。彼は少年時代から實に努力した。親に孝に朋友に親切であつた一面、寸陰を惜んで、絶えず向上進歩に努めたのであつた。一日生きれば一日だけ進歩することを心掛けたのだ。みだりに人と争はず、他人の言に傾聴して、自己修養に努力した彼は、何れかと云へば、大器晩成型であつた。いきどほることは生涯を通じて殆どなかつたが、公のためには一身を犠牲にして闘ふ人であつた。その上熟慮斷行、所信を貫くためには如何なる障碍をも物ともしない氣力があつた。

これらの優れた性質の融合が、かれの教育法を晩年に至るに従つて、愈々成長圓滿にし、最後迄青年の活力と新鮮味とを保たせると同時に、自ら時代^{そのイカ}に先んじた教授法を考案し、世にも稀れな力強い感化をその教へ子のみならず、日本の教育者達に及ぼしたのである。

彼が働き盛りの四十九歳で病歿したことは何としても惜しいことである。伊能忠敬が五十一歳にして始めて測量術を學び、七十歳を過ぎてあれほど立派な業績を完成したこと等を考へると、飛泉にせめてもう十年の齡を與へたならばと思はずには居られない。屹度大きな國家的の業績をなしたのにと惜しまれる。

併し乍ら、飛泉の實際なただけのことを願うても、あれだけの感化と、あれ程の貢献とを、日本の初等教育界に、日本の國民精神に與へたことは大なる働きに違ひない。

我々は、郷土の誇「眞下飛泉」に學んで、皇國の爲に盡瘁せねばならぬ。

五、波多野鶴吉翁



波多野翁肖像

我が郷土の恩人にして實行の聖者であつた波多野鶴吉翁こそは、實に秀麗な丹波の山川が産み出した誇るべき偉人の一人である。綾部町の北部に堂々一郭を占めた大製絲會社は翁の創立したものであり、この存在が平和な町に蠶都の稱を附與し、畏くも國母陛下の行啓を仰ぎ奉るにまで至つたのである。故に、その郡是製絲會社こそは翁の生きた記念碑であると共に地方への遺産であり、はたまた報國の殿堂と言つても敢へて憚るところはあるまい。

世の中は變遷する。事業には消長も免れまい。しかしながら、翁が道徳と經濟とを結合させて實踐躬行した手腕至誠は以て範とするに足り、新時代の二宮尊徳として遺徳いよ／＼芳しきを思はざるを得ぬ。

想へ。舊幕時代小藩分立して財政枯渴し、更に明治維新となり開化の急潮に輸入綿花に蹴落されて疲弊した在りし日の農村の姿を、よし多少の人物は在つても、爲めに郷關を去つてます／＼落莫たりし地方の窮局は、一體何人に依つて打開されたのであるか。

一時天蠶飼育が試みられなどした渾沌たる頃に、早くも養蠶に依つて地方を救ひ、産業開發、實業振興の郡是を樹立すべく決意したのは青年波多野鶴吉であつた。「他の人より一步先へ行かねばならぬ」と言ふ信條を推進するに石橋を叩いて渡る經營、しかしその成功に確實性を與へるに正しき信仰に生きたのが翁なのである。だから

明治二十九年に創立された會社は、つひに優良絲の生産を終始一貫して太平洋彼岸の世界的生絲業者ウキリアム・スキナーを動かし、外貨獲得の理想を達し産業報國の實を擧げたのである。

翁の詩に

昔是中絲國。今由上忽鳴。經營幾歲月。終始止專誠。

といふのがある。即ち明治十八年東京上野の博物館を會場に開催された全國五品共進會に於て酷評を蒙つたのは綾部地方の出品であつて、當時に福島地方から仰いでゐた蠶種にしても「三丹くだし」と稱する最劣等品であつたから、他は推して知るべしであらう。それが今日斯界に覇を唱へるに至つた所以を詢によく傳へてゐると思ふ。

その優良絲を生み出すに翁は人材主義をもつて當り、爲に今の城丹蠶業學校の前身を創設して、一は郷土の人材の他國に奔るに備へ、

一は確乎不拔の道念を基礎とする事業の發展を期した。「自分は郡是製絲を創め、郡内の繭で多勢の株主を集めてやつてゐるが製絲で儲けるよりも損をしまいとしてゐる。一體、製絲家は儲けるのではないかぬ。儲かるのでなければいかぬ」と、翁は喝破してゐる。そこに如何にも翁の面目が躍如としてゐるではないか。

日清戦争の頃、破綻に瀕した百三十銀行の整理に當つた安田善次郎氏は一日福知山町に来て支店の状況を調査した際、無擔保で多額の貸付をしてゐる郡是を視察する爲に綾部へも來た。飄然として彼はその地方の小會社を訪れた。すると門を入つて草むしりをしてゐる小使然とした男に社長の在不在を訪ねたのであるが、後に面會した社長こそは今しがた庭先で働いてゐた質朴な男に他ならなかつたので大いに驚くと共に感心するところも深く、この會社ならいくら資金の融通をしても大丈夫だと思つた。後年、同社大損失の

時、上京して援助を乞うた翁に對して、病臥中にも不拘、引見した安田氏は却て翁を慰さめ勵ました佳話は有名であるが、その知遇の動機は實に尊いものである。

今日、郡是製絲は資本金二千七拾萬圓、従業員二萬人、生絲製産額百萬貫、分工場は一府十一縣及朝鮮に互つて三十五を算し、其他蠶種製造所及支所は八ヶ所、乾繭所二十三ヶ所、出張所及營業所五ヶ所の多きに達し、實に斯業界第二位の大會社となつてゐる。姉妹會社のいくつか設立されるに至つて正に一箇のコンツエルンたる態様さへ備へてゐるのである。

翻つてその創立の経緯を思へば、遠く明治十九年既に翁は大製絲會社の必要を力説して愈、その誕生を見るまでに實に十年の歳月を閲してゐる。それが偶、日清戦争後の好景氣の波に乗つて呱呱の聲を擧げるまでの資本募集難の陣痛を凌いだ翁の意力の強さは以て

我々の範とすべきであらう。その社名の示すが如く會社設立の趣旨は専ら地方蠶業獎勵の機關たらしめるに在つて、養蠶家と製絲家とは利害休戚を共にすべきものとし、株主は悉くこれを養蠶家に求め職工もその子弟に求めた。その共存共榮の美しき精神はやがて正量取引の創始となつて何鹿郡に福祉を齎らして即ち國に報いるに在つた。今日の所謂國策會社の先鞭である。

また優良なる製品を得るには優良なる人間に依らなくてはならぬことを思つて、翁は最初から工女に熱心な精神教育を施して來たが、更に後年我國基督教界の逸材内村鑑三を城丹創設に際して迎へんとしたが、川合信水氏の招聘を見るに至り、社長たる翁自ら率先してその教を聴くに及んで徳化工女によく瀰漫して模範工場の出現となつたのであつて、翁の理想がかく教育に重點を置いた點は見遁すことが出來ぬ。

かくして翁は我國蠶業界の一流となつて中央に於ても貢獻するところあつたが、常に公益増進に意を用ひ、何鹿郡の電話開設に盡力し又城丹の他に今の綾部高女の前身の創立も計畫した。しかも政界に打つて出るが如き野心を持たなかつたところにその眞骨頂がある。決して單に明敏達識な事業家ではなかつた。

波多野翁遺墨

「人様は偉い。わしも

玉澤を己待天命

若い折にやりそこはねばもつと偉い人になる

んぢやつた。」と、或時、翁は夫人に漏らしたといふ。又會社の存亡に關する非運に見舞はれた時は「死んで申譯する決心までしながら、小心翼々完善に遷るを念とした翁の信用はそれを美事に打開し、神の恵か、時勢の力か、會社は自然に太つて後、

「會社は大きくなつてまゐりますが社長の人格が小さいことを哀

至誠盡己待天命 鶴堂

れみ給ひ、更に大いなる人格の人を與へ給へ。」と、衷心より祈る聲を夫人は屢々聞いたといふ。

この謙虚、この素朴、この至誠。故に翁に接する人々はいつか翁の薫化を受けざるを得なかつた。道の爲めに熱心な翁が松江へ傳道に行くにあたつて、川合信水氏は波多野さん、あなたは松江に行くに何を持つて行かれますか。孔子や基督の教を持つて行つたのでは、借物で自分の物ではないから、人に與へる権利は無い。又人も是を貰ふわけには行かぬ。眞に自分の物を提げて行かねばならぬ。」と注意した。が、何ぞ知らん、その話柄は全く長期に互る翁の實踐と智慧とから味識して全く身についたものであつたから、聴衆に與へた感銘も深刻であり、一時的のものではなかつた。そこに求道者、波多野翁の面目を看ることが出来る。新興宗教を開くに至つた川合信水氏も偉いが波多野翁は實に實行の聖者であつた。

抑、切支丹と言はれた當時の基督教に敢然飛び込んで行つてからの翁は別人として甦生したのであつて、ただ超國家的な信者でなかつたことが注目されねばならぬ。古今の忠臣義士、ことに西郷南洲、藤田東湖に傾倒し、また純基督教徒の爲さざる神社參拜を爲した一事を以てしても明白であり、殊にその傳道演説にさへ日本書紀を引用して、神武天皇肇國の御宣言に日本魂の精神の具體的顯現を説いてゐる。そして翁の信ずる基督教は決して肇國の精神、はたまた教育勅語の趣旨に少しも矛盾してゐないことを力説してゐるのである。「殊に我々日本國民は、國體上から考へましても、畏くも上御一人の爲に一層深く此の精神を養ふことが大切であると信ずるのであります。」と、蠶の生涯より學ぶべき教訓なる講演でも述べてゐる。翁の理想否實行は日本化された基督教であつた。翁には遺著が無い。しかし之に代るべき波多野翁講演集「一卷が

ある。その中の

- 一、我、戸の外に立ちて叩く
- 一、蠶の生涯より學ぶべき教訓
- 一、人生の経緯
- 一、日本魂と宗教

等に就いて観るならば這般の消息に通じ、その思想に國學、儒佛二教の交流を察することが出来よう。

その「日本魂と宗教」こそは翁の最後の講演である。

大正七年二月二十三日、翁は請はれるがまゝにその演題の下に當時郡立であつた綾部の女學校の雨天體操場兼用の講堂の演壇に立つた。雪を孕んだ陰雲の下を郡の在郷軍人は集り來つて、暖房設備も無く、仄暗い、そして寒氣の犇々と逼る會場に翁の發聲を熱心に待った。

壇上矮軀の翁はいつもの通り小さな手帳を卓に擴げて唸々として語り始めた。

それは當時國民新聞紙上に徳富蘇峯氏が日本魂が日本人間に薄らぎつゝありとの所説の浩歎に始つて教育勅語を奉讀引用して所論を進めようとしたのである。

そして

「畏れ多くも教育勅語には——と、卓上の小手帳を繰らうとして繰れない。

もとくゝその日は、翁の顔色勝れず、とかく氣勢も上らないやうであつたので時の町長由良源太郎氏が來賓席から

「御氣分が悪いのではありませんか。」と立つて翁をうしろから抱いて、靜に椅子に腰掛けさせたが——もう翁の體に弾力性は失はれてゐる。人々の總立ち、醫師、會社への電話。——夫人も見

える。社員も駈けつける。しかし羽織袴のまゝに翁は低い軒をかいて昏々と眠り續けて、應急の手當も何等效果なく腦溢血の急發で、つひに移されて其夜社宅の一室に六十一歳を一期として不歸の客となつた。

本意ないものであつた。

しかし謙虚にして素朴、明敏にして至誠一貫した翁としては、在郷軍人を聽衆として圓熟した最後の獅子吼に愛國の精神を吐露して昇天したのは凡死に優るではないか。

すでに翁は前年、國母陛下を苦心經營した會社にお迎へするの破格の榮譽を荷ひ、さきに紺綬褒章を授與せられ、また正六位に叙せられてゐたが、歿後の餘榮は大正十三年、大日本蠶絲會より恩賜賞を追贈せられた。しかも、後に今日嗣子を社長に推されて流風餘韻の及ぶところ翁が生涯手放さなかつた聖書に在る「一粒の麥の如きを

頌德碑面の
詩
日野巖氏作

覺える。豫言者故郷に容れられずといふが、綾部町の公會堂は翁を景仰する人々に依つて「波多野記念館」の名を永久に傳へてをり、蠶絲業組合また頌德碑を建て、之に酬いてゐる。

蕩兒革面即真人。竟築蠶都夙志伸。

德業通天坤駕到。愛鄉報國絕羣倫。

以て郷土の誇とすべく後輩の範とすべきである。

六、福知山藩藩政の概略

(一)

福知山城は山陰道の咽喉に當る福知山盆地の中央に位する小高い丘陵を占めてゐる。そしてその東端は斷崖をなして由良川の河岸にせまつてゐて規模こそ小さいが、攻め難く守り易い自然の要害をなしてゐるのである。それ故古來この地によつた群雄は多數あ

明智光秀

つたが、近代的城郭を構へて、城下町が發達する基礎を作つたのは明智光秀である。

明智光秀は天正二年織田信長の命をうけて、丹波平定の軍を起し、



福知山城

先づ龜岡園部を略し、口丹波を堅めて根據地とし、これより南下して、當時丹波一圓に富強を誇り、遙か毛利、武田等の群雄と同盟して京都の信長を挾撃せんとし、みる波多野秀治の八上城を攻撃した。

この戦には流石の光秀も苦戦を續け容易に平定出来なかつたので、終に信長の部將達の應援を得て口丹波、但馬、攝津の三方面より包圍攻撃の策をとつた。光秀は口丹波より兵をすゝめ、その支隊とし

横山城

福智山城

て弟光春は綾部を経て福知山に入り、こゝを據點として軍を整備した。この戦の結果、波多野氏は天正七年十月滅亡して、丹波は平定したから、光秀はその將四天王政孝を福知山の城代として附近一帯の施政にあたらせた。

武器が幼稚であり随つて戦も小規模であつた頃は、城も山嶽や丘によつて自然の地形を利用するに過ぎず人工を加へることは少なかつた。戦國時代も末期に入ると火器が進歩し大規模の戦闘が行はれだしたから、城も雄大堅固のものを必要とするに至り、築城術が著しく發達した。この近代的城郭の最初のもものは天正四年織田信長が安土に築いた七層の天主閣をもつ安土城だつた。

光秀以前の福知山城は横山城と稱し、丘の上に居館を構へた程度のものであつたが、光秀の入城によつて大いに修築し整然たる城郭を築き福智山城と改稱された。それと同時に城を中心とした町の

繁榮を計つて、城下に住む者には免税をなすなどの優遇をしたので、兵火に怯えて四散した住民も集り歸り、横山城時代の面目を一新した城下町の基礎が確立された。光秀がその後本能寺の變を起し、次で山崎の戦に敗れるのは天正十年六月であるから、光秀と福知山との關係は僅かの期間であつたにも拘はらず、後世特に彼の靈を勸請して御靈會を催したのは、彼のこの功績を慕つたのが重なる理由と思はれる。

杉原家次

小野木重勝

この後杉原家次が封ぜられたが、數年にして他に轉じ、天正十八年小野木重勝が封ぜられた。小野木氏は丹波の人で、元は波多野氏に屬したが、後織田氏を経て豊臣氏に仕へた人である。

豊臣徳川二氏の不和が昂じて終に慶長五年七月石田三成が兵をあげると、小野木氏も直に軍備を整へて豊臣方に加はつた。即ちさきに福知山藩主だつた杉原氏をはじめ豊臣氏の恩をおもふ大名な

田邊城
今日の舞鶴城

ど二十一軍一萬五千の總帥となつて、徳川方に加はつた細川忠興の田邊城を包圍攻撃した。この時忠興は主力を率ゐて關ヶ原に出陣し、城は父の幽齋が僅かの手兵をもつて守つてゐたので、兵力に劣る細川軍は最初から守勢をとつて籠城して敵を邀へた。小野木軍は七月二十日兩丹の國境を越えて、直に田邊城を包圍し、二十一日に入つて四方より攻撃を開始した。斯くてこの戦は籠城戦となつたから、はなばなしの戦鬪は見られなく、連日互に鐵砲をもつて小競合を繰返す程度で、持久戦となつてしまつた。

然るに細川幽齋は有名な歌人で、古今傳授と言ふ和歌の祕傳を知つてゐたのは當時彼一人であつたから、若し彼が戦死するとこの道は後世に傳はらず、こゝに絶えてしまふ憂があつた。後陽成天皇はこのことをいたく御軫念遊ばされ、かしこくも勅使を御差遣し給うて、兩軍の和平を勸告せしめられた。こゝに於て小野木軍は詔をか

しこみ園をといたので數十日にわたる戦は終つた。

九月に入つた東西兩軍の主力が關ヶ原に決戦し、東軍が勝利をしめて、徳川氏の覇權が確立すると、西軍の敗殘諸將の掃討が全國に互り開始された。細川軍も戦勝の餘威をかり、主力をもつて福知山に軍をすゝめ、福知山城を包んだ。西軍の間に多少の戦も交へられたが、最早如何ともすることの出来ない四圍の情勢を察した小野木重勝はいさぎよく城を明渡し、自から龜岡の壽山庵に退いて自刃した。時に慶長五年十月十八日であつた。

有馬豐氏

慶長五年十一月遠州から有馬豐氏が封ぜられて來た。有馬氏はその後元和六年筑後に轉じたから、その治世は二十一年に及んで、今迄の大名中一番永く在任した上に、平和も全く回復したから其の治績は諸方面に及んだ。

有馬氏の封地は六萬石と稱したが、それは昔の不正確な調査によ

有馬檢地

るものだつたので、實地に臨んで田地の調査測量をして、その廣狹を正し、收穫高の標準を定めて、これを基礎として税制を改めた。これを世に有馬檢地と言ひ、後世まで當地方の田租の基準とされた。

舊切通し

光秀の保護政策以來城下は人口が増加し、市街が發達して、有馬氏の時代(慶長年間)にはいよゝゝ大きくなつたので、その四方に十ヶ所餘の門を設け、警備を嚴にして治安の維持につとめた。又今日の舊切通しと稱せられる所を切開いて、市街の南北の交通を便にしたのもこの時代のこととて、町の膨脹を物語つてゐる。要するに有馬氏の治世時代に福知山は城下町としての內容形態をそなへるに至つたと言へる。

岡部長盛

有馬氏に代つたのは龜岡に居た岡部長盛であつたが、治世僅か四年にして他に轉じたから殆んど記すべき治績を認めない。次いで寛永元年伊勢より稻葉紀通が轉封されて來、四萬五千石を領した。

稻葉紀通

正保四年の冬紀通は宮津藩主京極高廣に名産伊根の鯺百匹を送られんことを乞うた。高廣は生來粗暴の人であつたからこの申込を受けるとこの鯺は恐らく稻葉氏が誰か権力者に賄賂として贈るものならん、と言つて百匹の鯺の頭を全部切り放つて送つて來た。この非禮に接した紀通はいたく激怒して報復をはかつたが、適當の手段も考へ得ず、焦心のあまり終に宮津藩士の福知山城下を通り過ぎるのを見受けて、これを小銃をもつて殲した。この凶變の報に接して流石の京極高廣も事の意外なるに驚き、直に國境に兵を集めて警備を嚴にすると共に、福知山藩の暴力行爲の不當なる所以を幕府に訴へた。福知山藩に於ても事件の擴大を怖れて、京都所司代板倉重宗に真相を釋明して、圓滿解決をはかつたが、幕府は事件を重大視し、出府して眞の陳述をなすべしと召喚狀を發した。京極高廣の行爲は暴狀ではあつたが、これに對して人を殺すと言ふことはたしか

に過激に失した報復手段であつたから、この弱點を自覺した福知山藩では事件の圓滿解決の困難なことが豫想され、色々な噂が飛んで人心が甚だしく動搖した。この時、宮津軍國境を越えて福知山領に入るとの流言が傳つたので、紀通は責任の免るべからざるを思ひ、城中に於て自刃した。慶安元年八月二十日のこと、こゝに稻葉氏は斷絶した。

松平忠房

慶安二年參河より松平忠房が四萬五千石で封ぜられて來た。松平氏は精神作興に最も力を注いだ大名だつた。今の水源地附近の駒ヶ淵と言はれた沼地を埋め立て、高十五石の新田を拓いて一宮神社に寄進したのを始めとして、一宮、天照、荒木、愛宕、庵我の社を五社と稱して、社殿の修築、神田の寄進等をなして敬神の實をあげた。五社詣り、と言ふのはこの時代に始められたのである。孝子節婦の表彰も盛に行つた。かの芦田爲助が丹波の孝子とし

五社

芦田爲助

て江戸にまで知られ、廣く世の鑑となつたのも松平氏の表彰により世に知られたからである。弘文院林學士の作つた孝子傳にはこの事情を物語る一節がある。「城主江府に朝し、是を以て余に語り其事を記せんことを求む。余節を撃ちこれを嘆賞し、これがために其の事實を述ぶ。」斯くして出來上つた孝子傳に感激した高山彦九郎は遙々と孝子を慕つて福知山土師の地を訪れて來たのであつた。

(二)

松平氏は治世二十一年で肥前島原に移り、代つて土浦より朽木植昌が寛文九年轉封されて來た。天正以來戰國動亂の餘風をうけて、天下は安定しなかつたから、杉原氏以來この時まで八十四年間に藩主は六回も變つた。しかるに朽木氏の時代は四代將軍家綱の時代であるから、平和となつてから相當久しく、従つて政局は安定し文治主義の政治が行はれる様になつた頃で、大名の轉地も稀となつた。

朽木氏

初代 朽木植昌
寛文九年(一七六九)寶永五年(一七二八)治世四〇年(一七六〇)年、年七二(年號は治世を示し年は歿年)
 二代 植元
寶永五年(一七二八)享保六年(一七三三)治世一四年、年五八

朽木氏はこれより明治維新まで十三代二百年の間福知山藩主として施政に當つたので、當地方として最も縁故の深い大名である。

朽木氏は宇多源氏の出である佐々木氏の支族で、近江朽木庄の地頭となつたから朽木を稱した。關ヶ原の役には東軍に屬して功あり、よつて土浦に封ぜられて譜代の列に加はつた。

朽木氏は天田郡に三萬九百石、近江に千十石加せて三萬二千石の小藩であつたが、代々の藩主は民治に意を用ひ、學問を好みその治績見るべきものが多かつた。

初代植昌公の延寶五年火を失して城下が殆んど全焼した。こゝに於て用水池を作り火災に備へた。この池は後年泥濘と化して使用に堪へぬに至つたので幕末に至つて埋められた。その地が今日市民に親しまれてゐる廣小路である。晩年に福知山城の開祖明智光秀の靈を常照寺に勸請した。四代植治公の元文二年に至り町民

三代植綱
享保六—享保一
治世六年、年一七

四代植治
享保一—享保一三、
治世四年、年七七

五代玄綱
享保一三—明和七、
治世四一年、年六二

の願により御靈會舉行が許され、初めのうちは常照寺境内に於て子供角力作り物等の餘興が催されたが、嘉永年間に今日の所に御靈を

うつし、秋の例祭は一層盛大に行はれ、福知山年中行事の名物となつた。

光秀以來福智山と書いてゐたのを四代植治公の享保十三年に智を知と改めた。

五代玄綱公の治世に當る享保十八年は關西一帯が大凶作であつたから、飢饉となり窮民が

多く出て世情騒然たるものがあつた。福知山藩に於ても同様大凶作であつたので困窮した農民達が翌十九年に大舉して城下に詰寄せ藩主に訴へた。藩は主謀者を處罰した。その主謀者に對する判決文に「徒黨を致し大勢御城下に晝夜相詰め、甚しく騒動し其の仕方御地頭を恐れざる體は不届至極に候。」と言ひ、以下百數十名がそれ



く處罰されてゐる。然しこの判決は暴動の起つた時から十一年も後になつて行はれてゐる點から見ても、法度を犯した點は許し難いとしても、同じ判決文に言ふ「百姓の頼の品により、無據筋を申上候儀は可有之事に候。」と言ふのが真相らしく、當局はこの處斷について苦慮を重ねたものと想像される。

六代綱貞公は前代に農民が甚だしく窮乏した事實を知つてゐたためか、深く民情に意を用ひ、常に微行し領内を巡視して民意を知ることを楽しみとした。今日傳つてゐる公に關する逸話を見ると、仁慈温情にて民の言葉に耳を傾け、藩士に對しても寛仁で常に自らを反省してゐたやうである。公は星橋と號して狩野派の畫をよくし、餘技の風を脱して一家をなし、又秀でた歌人でもあつた。

七代舖綱公も亦民政に腐心し、先賢の言行を鑑とし、治亂興亡の跡を尋ねて常に己が戒としてゐた。公がこの點に如何に日夜苦心し

六代
朽木綱貞
明和七—安永九、
治世一一年、年七七

七代
朽木舖綱
安永九—天明七、
治世八年、年五八

擬獨語
原本は朽木子爵家にあり、その寫本は本校に藏す。

たかはその著述擬獨語二卷に十分窺ふことが出来る。遺憾ながらこの著述は刊行されなかつたので、世に知られてゐないが、いつの世にも生きてゐる經世の大文字である。

天明八年に幕府の巡見使が來て、藩政を監察した。その時の覺書を見ると百五十年前の福知山の面影を想像することが出来る。

一、町家數 九百拾五軒

一、人數 三千三百三人 男千六百六十三人 女千六百四十八人

一、御城 堅六丁餘 横東西四丁許有之哉

一、名物 栗、山椒、蕨

八代昌綱公が偉大な蘭學者で、日本文化に貢献されたことは別章の通りで、公こそ福知山が天下に誇り得る傑出した人物である。

九代倫綱公は領民を教化することによく意を用ひた。即ち教導

八代 朽木昌綱
天明七—寛政一、二、治世一、四年、年五三

九代 朽木倫綱
寛政一—享和二、治世三、年、年五二

師を設けて定期に巡視せしめ、公の自作岩間の清水を教材として薰化に努め、時として公自ら出かけて、寄べなき老人や貧民を見れば金穀を與へて憐み、孝子を求めて表彰するなど仁政大いにあがつた。〔岩間の清水〕は最初に、

「親にはねんごろに致し、兄弟仲よく、夫婦むつまじく、何事にも和らぎかど立たぬやうに、能く言ひ合せて暮す者を誠の人といふなり。」と言ひ、極く平易な言葉をもつて孝行をはじめ五倫の道を分りやすく説いてあつて、仁君の面影を遺憾なく偲ぶことが出来る。

十代綱方公は學問に意を用ひ、多年の懸案であつた藩校即ち惇明館を起した。七代鋪綱公の頃より學問勃興の氣運いよく盛で、經書の講義が度々行はれたが、學館建設の運までには至らなかつた。文化三年に至り今の惇明館が建設され、教學大いに振興され、次代綱條公に至り和漢數百部の書籍を集め内容の充實を見るに至つた。

十代 朽木綱方
享和三—文政三、治世一八年、年五二

十一代
朽木綱條
文政三(天保
七)治世一七
年、年三七

一宮神社神
殿の額



書 侯 條 綱

綱條公の時代は福知山の藩學が最も榮えた世だつた。藩公は當時の碩學で幕府の儒官となつた佐藤一齋について經書を學び、書道を市川米菴について究めた。今日公の傑れた詩がのこつてゐるし、又儒學の正道を傳へた書として今日も愛讀者をたぬ佐藤一齋の言志録は、公が二十五歳の青年の時、師の學徳に傾倒して原稿を整理して出版したものである。斯様に好學の君であつたから、藩士の中にも學に志す者が多く出たが、中にも近藤商臣が最も傑れてゐた。近藤先生は藩公と同じく佐藤一齋に學び、日夕端坐して書を讀むこと多年に及んだので、終に四十歳の年

跛となつたと言はれる。惇明館に教授すること三十年、未だかつて一日も缺かさず、明治に及んで學館閉塞さるゝや、私宅にて業を授け倦むことを知らなかつた。明治九年七十九歳にて卒した。現在笹尾にある先生の碑は門弟が徳を慕つて建てたものである。

(三)

斯様に學術は興隆したが、他面久しい泰平の間にいよゝ爛熟した江戸の文化は漸く福知山にも波及して來て、世情華美を好み、士風頽廢し、民風柔弱となるの傾向が強くなり、顯はれて來た。これをいたく憂へた綱條公は、福知山藩が泰平の恩澤に浴し得るは、藩祖植綱公草創の鴻業によるとし、その靈を城南に祀り、その恩に應へしめんとした。これ即ち今日の朝暉神社の起源である。卑俗な遊藝を退け、風紀を肅正する意味から能樂を獎勵し、朝暉神社の例祭には能樂の奉納を行ふを例とした。相撲を獎勵したのも亦この意味からであつ

朽木植綱
植綱父元綱は
關ヶ原の役に
功あり、九千
五石を賜ひ、
その第三子植
綱に至り、常陸
土浦に三萬石
を賜ひ、大名と
なる。

第十二代
朽木綱張（天保七―慶應三、治世二十七年、年五二）

た。

このやうな改革的政策も滔々として浮華安逸に走る世風を矯正することは出来なかつた。世の中が派手になると共に財政は次第に苦しくなつて、幕府をはじめ諸大名は殆んど借金に苦しむ實狀だつた。福知山藩も亦この例にもれず文化文政の頃から財政の困難が目立つて著しくなつた。十二代綱張公の代となると財政を根本から建直す必要にせまられた。幕府に於て水野忠邦の天保改革が始つて間もない天保十三年に至り今迄に見ない厳しい儉約令を公布して、百姓の日常生活を細大となく規定して勵行を嚴達し、他面藩直轄の産物所を設けて領内の産物は總べて産物所に集荷して、これを藩で賣買しその利潤を収めることにした。このやうな政策は幕府諸藩に於ても實行されてゐたこととて、統制經濟政策とでも言ふべく、十分の考慮が拂はれたならば財政改革に効果を収めることが出

市川騒動

來たであらうが福知山藩に於ては年と共に民力を壓迫すること甚だしく、民情を顧みる事がなかつたので、百姓の生活は極度に制限された。然るに他面財政の局に當つた人々は年と共に産を増し、その生活は舊に倍して奢侈となつて行つた。長い間堪へ忍んで來た朴直な農民もこの矛盾に氣付いて終に一揆を起したのである。萬延元年八月二十一日午前八時頃、丹後口よりの亂入を先驅として、四方より暴民闖入して財政當局者産物所等怨望の的となつたものを襲つて焼き拂ひ、二晝夜に亙つて暴動が行はれたために焼失家屋二百餘軒、生糸をはじめ多量の産物も烏有に歸した。彼等の代表者數名は、財政當局者を處決せしむること、苛税となる政策の撤回、今回の暴動について處罰せぬこと、など強硬な陳情十三ヶ條を當局に差出した。當時藩公は上府中であつて、藩では甚だ狼狽し、極力慰諭に努めたが、財政當局者が事情の非なるを見て自決したので、暴民は漸く退去

した。これを世に市川騒動又は福知山噉訴と言ふ。

世風の頹廢と言ひ、百姓一揆と言ひ、獨り福知山藩のみのことではなく、全国各地に瀰漫し、瀕發したので爲政者を惱ますこと甚大であつたが、他面、尊皇攘夷の論争と共に喧しく、國體に對する自覺が徹底して尊皇の大義を顯現せしめんとする運動が強調され、幕府の政策に對して鋭い批判掣肘が試みられるに至つた。特に安政以來外交問題に關聯し、政情は混沌として歸趨する所を知らず、諸藩に於ても概ね保守、革新兩派の論争あり、甲論乙駁して藩論定まらず、物情騒然たる状態であつた。福知山藩に於ても士風はすたれ、財政困窮を極めて藩政は危殆に陥つたが、重臣達は爲す所を知らず、徒に因習にとらはれて改革の實は擧らず、他面駸々としてせまり來る外圍の新狀勢に對しても全く無自覺にして、只徒に日を過す有様であつた。

この内外未曾有の難局に刺戟されて、少壯氣銳の士十二名が蹶然

飯田節

起つて、國體の闡明、秕政の刷新を叫んだ。これを「十二人衆」と言ひ、飯田節がその盟主であつた。飯田家は藩の重臣であり、節は早く父を喪つたので、十九歳にして世祿をつぎ、畫策する所多かつたが、市川騒動に悟る所あり、翌文久元年祿を返上して江戸に遊學した。彼は既に在藩時代、洋式兵制を採用した程の卓見を有してゐたから、江戸にあつては廣く天下の有志と交はり、時局を洞察するに努め、傍ら在國の同志に向つて尊皇思想を鼓吹し、藩政改革の急なる所以を力説した。文久二年彼が國許の同志に送つた書簡の一節に次の如き文句がある。

「萬一幕府天朝へ御背の節は……御家は是非徳川方へ御身方之事故死を以て御諫、絶て幕府にて御用ひ無之節は三萬石を歸し江州へ御引籠より外有之間敷候」

幕府に諫言してもきかなければ、故郷の江州へ引籠るより外はな

いと言ふ考へは、今日から考へると消極的な見識で悟り切らぬ憾みがあるが、封建制度の依然とし存してゐる當時譜代大名の立場を考慮して、こゝまで徹底した考をもつて行動してゐた人が果して幾人あつたであらうか。

彼の眞摯敢闘の精神は藩政の改革に於て最もよく顯れてゐる。宇戈一度動けば内亂外寇並び起る必至の狀勢であるから、先づ大義を分明にすることが緊急のことである。藩士達が大義に暗いのは不學なるによる。それ故學問を大いに勵み大義を明かにする事が緊要である。藩公は歴代殆んど江戸に居住して、歸國すること稀であつたから在府の諸士も多く、この爲め多額の費用を要し、且、文弱遊惰の風にそまることも多いから、この風を改めて歸國せしめることが肝要である。又軍制を改革し、西洋式兵制を採用し、小銃大砲等の新兵器を充實して非常に備へねばならぬ。諸事改新の時代である

から、家格によらず有能なる青年を簡拔し江戸に留學せしめて東西の學を修めしめ、世の進運に遅れざることを要す。』と言ふのが彼の意見の大様で、これ等の策を實現するための具體案を示して、江戸詰の重臣に屢々建議したが、因循姑息にしてなすなく、或は頑迷にして度し難く、容易に實現さるべくもなかつた。殊に目付役角川彦右衛門は固くこの建議に反對した爲、節をはじめ十二人衆は手段を盡くして説得に力めたが角川は自説を固持して頑として應じなかつたので、血氣の十二人衆は最後の手段に出るべく決意した。元治元年四月十二日、同志相携へて角川邸に至り、荒川音次郎先づ入つて、角川と對坐して談論し、他は戸外にあつて機を窺つた。頃あつて荒川隙を得て角川に一刀を浴せたため、角川難をさけんと玄關に逃れたるを待機せる同志が集り之を殫したのである。

十二人衆の行動は藩を思ふの至情に出たとは言へ罪科免るべき

もないので、藩では死罪を決意したが、一時に多数の人材を失ふを惜んで容易に決せず、終に十月に入つて十二人を福知山に移して幽閉した。節は同志の統領として責任をとり自刃する事により他の同志を救はんとした。このことをかねてより親交のあつた鳥取藩士柴捨藏は察して、福知山藩の重臣に寛大の處置あらんことを乞ふと共に、獄中の節に次の一首を贈つて切に自重をうながした。

山櫻さそふ嵐の吹きしくも

あだには散るな人の問ふまで

十二人衆が幽閉されてゐる間に政情は激變して、蛤御門の變、次いで長州征伐となり、攘夷實行の令下り、このために聯合艦隊の下關砲撃が行はれ、波瀾重疊の中に元治元年は暮れたのである。斯くて福知山藩に於ても節等の才腕を待つこと甚だ急なるものがあつたから、翌慶應元年に入り十二人を釋放し、藩政に盡瘁せしめることとし

た。節は直に藩命に依り京都に出て、烏丸にあつた藩邸に寄寓して、當時京都に蝟集し策動してゐた多数の志士と交はり、重きをなして、福知山藩人材ありの感を深からしめたが、一面福知山の藩狀は沈滞を極めてゐたので、翌慶應二年歸藩を命じて、惇明館總裁、次いで年寄役につかしめ藩政を總理せしめた。時に年齒僅かに三十一歳であつた。福知山の士風は舊態依然として徒に偷安に耽り、彼の志す所と甚だ異なるものがあつたから彼は覺醒大いに努める所があつた。京都の同志へ送つた書簡の末尾に「我藩の形勢實に一笑一嗟、次早春有感之歌候、御推察可被下候」と言つて次の詩を添へてゐる。

歸來未見士風新 情態猶如無事辰

忘却將家當大難 闔藩祝唱太平春

慶應三年八月回天の大業近きを感知した彼は京都に赴き、王事に奔走すると共に、藩の嚮ふ所を誤らざらしむべく畫策に努めた。蓋

し彼は心中己が言動の一國天下に繋るあるを期したのであつた。然るに偶、十月二十三日、京都圓山に於ける志士の會が催されたので、これに出席し所信を披瀝し堅く他日を期して歸途についたが、四條大橋東の祇園通りに差かゝつた時幕府の巡邏隊に遭遇し咄嗟の間に刺殺された。

飯田節が非常の抱負經倫を有しつつ、その實現された點の意外に少なかつたのは、彼の材幹に依るよりも四圍の事情が彼の驥足を十分に展ばすを得しめなかつたによる。福知山藩は譜代の小藩であつたから、幕末の革新期に臨んでも進んで事に當るを欲せず、自然保守的であつたから、彼が十分の手腕を發揮する餘地はなかつたのである。彼にして西郷隆盛に於ける島津齊彬の如き環境と理解者を得たならば、千里の馬たるの眞價を發揮し得たものと惜まれる。

慶應三年五月十三代爲綱公がついだ。この年十月將軍大政奉還

十三代
朽木爲綱
慶應三年襲封
福知山藩知事
明治一六年卒、
年三九、
王政復古

版籍奉還

し、王政復古の大詔下り、越えて四年正月西園寺公望を山陰道鎮撫總督に任じて、山陰諸藩の綏撫に任せしめられた。西園寺總督は一月十四日柏原を経て福知山に着陣し、十八日まで滞在し、丹後方面諸藩の向背をさぐつたが、共に錦旗を望んで歸順を誓ふに及んで、十八日由良川を下つて舞鶴に向つた。この年會津を盟主とする奥羽北越方面に兵亂が起つたので、仁和寺宮嘉彰親王の麾下に屬して福知山藩よりも五十九名が出征して、勇戦奮闘し二名の名譽の戦死者を出した。よつて翌年感狀並に賞金を賜つた。この年六月版籍奉還のことあり、同月二十日藩公は福知山藩知事に任ぜられた。斯くて明治維新とは言ひながら、從來に變りない藩政の延長であつたが、明治四年七月に至り廢藩置縣となり、十月豊岡縣に編成され、封建政治全く廢されて、輝しき新政へ發足したのである。

七、傳説の大江山

昔丹波の大江山 鬼共多く籠り居て
都に出ては人を食ひ

此の古い歌によつて我々少年時代の頭に印象づけられた大江山は、怪奇なる夢と傳説の山であつた。酒吞童子の傳説は廣く人口に膾炙せられ、鬼の棲む山として大江山の名を知らぬ者は恐らく無い事であらう。

然し古く大江山と呼ばれたのは此處では無く、丹波と山城との境にある大枝山の事で、大江山とも書き、今老坂と呼ばれて居る山である。古歌に大江山と歌はれて居るのは皆此の山で、こちらの大江山は昔は「與謝の大山」と呼ばれて居た。

丹波路の大江山の山の眞玉葛たえむの心我は思はず

(萬葉集卷十二)

夏草はしげりにけりな大江山越えて生野の道もなきまで

前參議忠定(新後拾遺)

たむごにありけるほどかみのほりてくだらざりければ十二月十日より雪
いみじうふるに

待人はゆきとまりつゝあちきなく年のみこゆるよさの

おほ山

(和泉式部集)

従つて百人一首の中にもある小式部内侍の歌も山城境の大江山を指すのである。それは金葉和歌集に次の如く出て居る。

和泉式部保昌に具して丹後國に侍りけるころ、都に歌合のありけるに、小式部内侍歌よみにとられて侍りけるを、中納言定頼つぼねのかたにまうできて、歌はいかゞせさせ給ふ。丹後へ人はつかはしてけむや、使はまうでこずや、いかに心もとなくおぼすらむなど、たはぶれて立ちけるをひきとめてよめる。

大江山いく野の道の遠ければまだふみも見ずあまのはしだて

酒呑童子の住んだ大江山も亦老の坂だと云はれる。平凡社の地名大辭典に酒呑童子の傳説は丹波の大枝山に出沒して行人を惱ませる山賊を頼光が退治したる事を誤り傳へしものならん」とある。然し傳説の事ではあり、確たる歴史上の事實でもなく、古くから此處の大江山の傳説として傳へられて居る以上、我々は此の土地の傳説として尊重してもよいと思ふ。

謠曲大江山を見ると都のあたり程近きこの大江の山に籠り居て。又はこゝは名を得し大江山、生野の道は猶遠し。天の橋立、與謝の海、大山の天狗も我に親しき友ぞと知ろしめされよ」とあり明らかに山城境の大江山として居るが、謠曲より少し時代の新しいお伽草子の「酒呑童子」には丹波の國鬼が城へ尋ね行き、「いかに山人、此の國の千

丈嶽はいづくぞや」とあり、近松門左衛門作の淨瑠璃酒呑童子枕言葉にはおひもならはぬおひの坂越えて生野の道遠き」とあり、閑田耕筆(伴蒿蹊)には大江山二所あり。丹波、山城の界檜原の西俗老の坂と稱ふるもの。(略)又丹波丹後の界なるものは酒呑童子といふ賊の籠りし所にて今千丈ヶ嶽といふ」とはつきり兩山を區別してゐる。即ち室町時代の終り頃から江戸時代にかけて酒呑童子の傳説は丹後の大江山の事と、て一般に物語られて居たのである。今更此の土地の大江山の話では無いなど、否定するにもあたらないだらう。此の傳説の起源に就いては江戸時代の隨筆等に色々考證して居るが結局はつきりしない。源頼光が勅を受けて大枝山の賊を退治した事があり、それが此の傳説の基であらうと一般に云はれて居る。大日本人名辭典、頼光の部に丹波大江山の山賊酒呑童子と云ふ者盜群を率ゐて出でて京都を劫かす。頼光敕を奉じて之を討ず(大日本史)

とあるが大日本史を見るに頼光の武勇に關する記事は色々載つて居るが、此の山賊退治の事は書いては無い。結局新撰人名辭典に、彼の大江山酒顛童子の話は世に名あるものであるが、これは何等史實に見るところがない。とある様に勅を奉じて賊を討つたと云ふ事は古記録には無いのが眞實であらう。

丹後成相寺の寶物中に頼光の願文と云はれる記録が残つて居る。其の文面は

攝津守源朝臣

此度當國大江山爲夷賊追討蒙勅令發向訖、速祈觀音大士之擁護所可被抽丹誠條如件

寛仁元丁巳三月十一日

成相寺衆徒

敬白

何處まで信を置けるか解らないが、夷賊とある所を見るとえびす

即ちアイヌの賊でも住んで居たのではないかと思はれる。

此の酒呑童子はお伽草子等によると故郷は越後で、或る山寺の稚兒となつたが、人を殺して追出され比叡山に移つたが、此處も傳教大師の法力に追出され、各地を逃げ廻り遂に大江山に居を構へる様になつたと云ふ事である。今新潟縣口上村口上寺くがみの境内に酒呑童子の窟があると云ふ。(百科大辭典)

江戸時代の小説や淨瑠璃に此の傳説は可成り澤山取り扱はれて居るが、大抵謠曲やお伽草子に依つて書いたもので、話の筋も同様であり、文章まで同じ所が澤山見當る。其の中でも近松の作は大文豪の靈筆に生かされて興味深い作となつて居る。其の中に母が可愛がり大きくなるまで乳を飲ませたので人の肉の味を知る様になつたと童子が物語る所があるが、此處を太田蜀山人が批評して、述懐の段あわれに聞ゆ。名人の書るものにはかゝるあらくれたるものを

あわれに見する事筆力の妙なりと稱讚して居る。
酒呑童子を取扱つた作品は随分多數に上るであらうが自分の乏しい材料から調べ得たものは次表の通りである。

書名	種類	著者・上演場所	年代
大江山別名酒呑童子	謡曲	世阿彌	室町時代
大江山繪詞	小説(繪卷物)		同
酒顛童子	お伽草子		同
酒呑童子	淨瑠璃	宇治加賀掾	貞享頃
當世酒呑童子	歌舞伎	江戸中村座	元祿十四年
鬼城女山入	同	江戸山村座	元祿十五年
酒呑童子枕言葉	淨瑠璃	近松門左衛門	寶永四年
傾城酒呑童子	同	同	享保三年
繪屏風酒呑童子	歌舞伎	森田座	享保十九年
酒呑童子出生記	淨瑠璃	豊竹若太夫	延享三年

けいせい酒顛童子	歌舞伎	森田座	延享五年
酒呑童子	青本	不明	寛延二年
酒呑童子出生記	同	不明	寶曆八年
けいせい千丈嵩	歌舞伎	森田座	明和二年
酒呑童子廓雛形	黒本	不明	同
酒呑童子物語	同	同	不明
頼光山入	赤本	同	同
大江山大通山入	黄表紙	唐來參和	天明四年
頼光邪魔入	同	桐座	天明五年
四天王大江山入	常磐津	飛田琴太	天明六年
大江山二期榮	黄表紙	南柚笑楚滿人	天明八年
頼光一代記	同	十偏舎一九	寛政十二年
大江山幾野紀行	同	同	同
増補大江山物語	同	同	同

酒吞童子話
大江山酒顛童子談

淨瑠璃
合卷

佐川藤太
吉田新吾
十偏舎一九
文化十一年
文政三年

八、福知山盆地と由良川

福知山市から綾部町まで、長さ東西十四軒、南北の幅一、五軒の細長い平地が福知山盆地の胴體部をなし、これに土師川、牧川、犀川等の支谷が加はつて複雑な形をなしてゐる。

盆地の周邊には美事な段丘が四五段に互つて發達してゐる。最も有名なのは長田野で、面積約四方軒あり、海拔高度約七十米に達し、それが殆んど平坦面として残つてゐる。周圍より小さな谷が入り込んで侵蝕を始めてゐるがその程度が至つて若く、練武場として好箇の地を提供してゐる。これと同性質のものが綾部西北の以久田野である。面積は長田野の半分位あり、農場として開墾利用されつ

ゝある。その他の段丘は聚落地又は耕地に利用され本校も三十米の段丘上にある。水害の多い福知山では一部聚落地に利用せられ、女學校等は何れも四十米段丘上にある。福知山城址はかゝる段丘の北端部にあり、朝暉山と稱せられてゐる。

此等段丘の地層は粘土と砂礫とから成り、湖底堆積層と考へられてゐる。即ち盆地は地質時代には湖水であつたが、土地の緩慢な上昇と、由良川の浸蝕作用との爲に漸次湖沼は消滅し、周圍に段丘を残したものである。

盆地には米、麥、桑等の栽培が盛に行はれる。桑畑は低平で水害の多い由良川沿岸地に主に耕作せられてゐる。府下に於ける桑畑の過半数が沿岸の諸郡に存する。盆地内に散點する聚落の形式は大部分が集村でそれが盆地周邊の段丘上に多いのは注目し値する。盆地内をゆるやかに蛇行しながら貫流する由良川は、主として灌

漕に利用せられ、魚族も多いのでその漁獲高は相當額に上つてゐる。

鮎は殊に名高い。此の河谷は交通路として利用せられ、山陰線綾部街道が並走してゐる。鐵道建設前には河口の由良より福知山市まで舟が通じ、鹽魚貝海藻米穀雜貨等の取引が行はれた。

源は丹波・山城・近江の國境をなす三國嶽(九五九米)に發し、大野川と稱せられてゐるが、高屋川を合し、後由良川の名を得てゐる。上林川・岸川・土師川・牧川等は主なる支流である。長さは百四十軒餘に過ぎないが種々の特色を有つてゐる。その要點を挙げると左の如くである。



由良川より鬼城山を望む

1. 支流の多い事。大小凡そ百五十の支流を容れる。

2. 流域面積が廣い事。凡そ千八百方軒に達する。

3. 低位置を流れてゐる事。福知山盆地は、丹波第一の低地で、市の北端で十五米餘。綾部北部で三十九米に過ぎない。

以上の特色は洪水の原因となり易く、殊に大支流の土師川と丁字形に交つた部分に發達した福知山市は古來屢々水害を被つた。

九、福知山市

福知山市は人口約三萬二千ある。福知山盆地の西部に城下町として發達した丹波第一の聚落である。地方的交通政治經濟文化等の中心をなし種々の特色を見る事が出来る。

市が發展の基礎を置いたのは凡そ三百數十年前、天正初年明智光秀の築城により城下町となつてからである。其後朽木氏三萬二千

石の城下として十三代二百年餘繼承、丹波の京と稱せられて明治維新に及んだ。明治二十二年町制施行、三十二年福知山線、三十七年舞鶴線、四十四年山陰線等相ついで開通した。又昭和十一年十月一日には隣村の雀部庵我下豊富の三ヶ村を合併し、翌十二年四月一日より待望の福知山市となつた。

市は山陰の大阪とも稱せられ、商業が盛である。之は道路鐵道等の要地を占めること、京都及び大阪に近く原料の得易いこと、市民の勤勉にして商才に長じてゐる事等の爲である。その商圏は三丹地方を根據として、山陰北陸地方にまで達し、遠くは九州・朝鮮・滿洲・支那にまで及ぶものがある。取引品の主なるものは呉服太物・酒・雜貨品・荒物・陶器・肥料・石炭・材木等その種類が多い。郡是製糸及び鐘淵紡績會社の福知山工場があり、地方蠶糸の集散地であるばかりでなく、生糸の大生産地である。農蠶具の製造・藥品・人毛・マット・木工・清酒・菓子

等の工業製品は相當注目すべきものであるが、工業都市として發展するには一段の飛躍が望ましい。

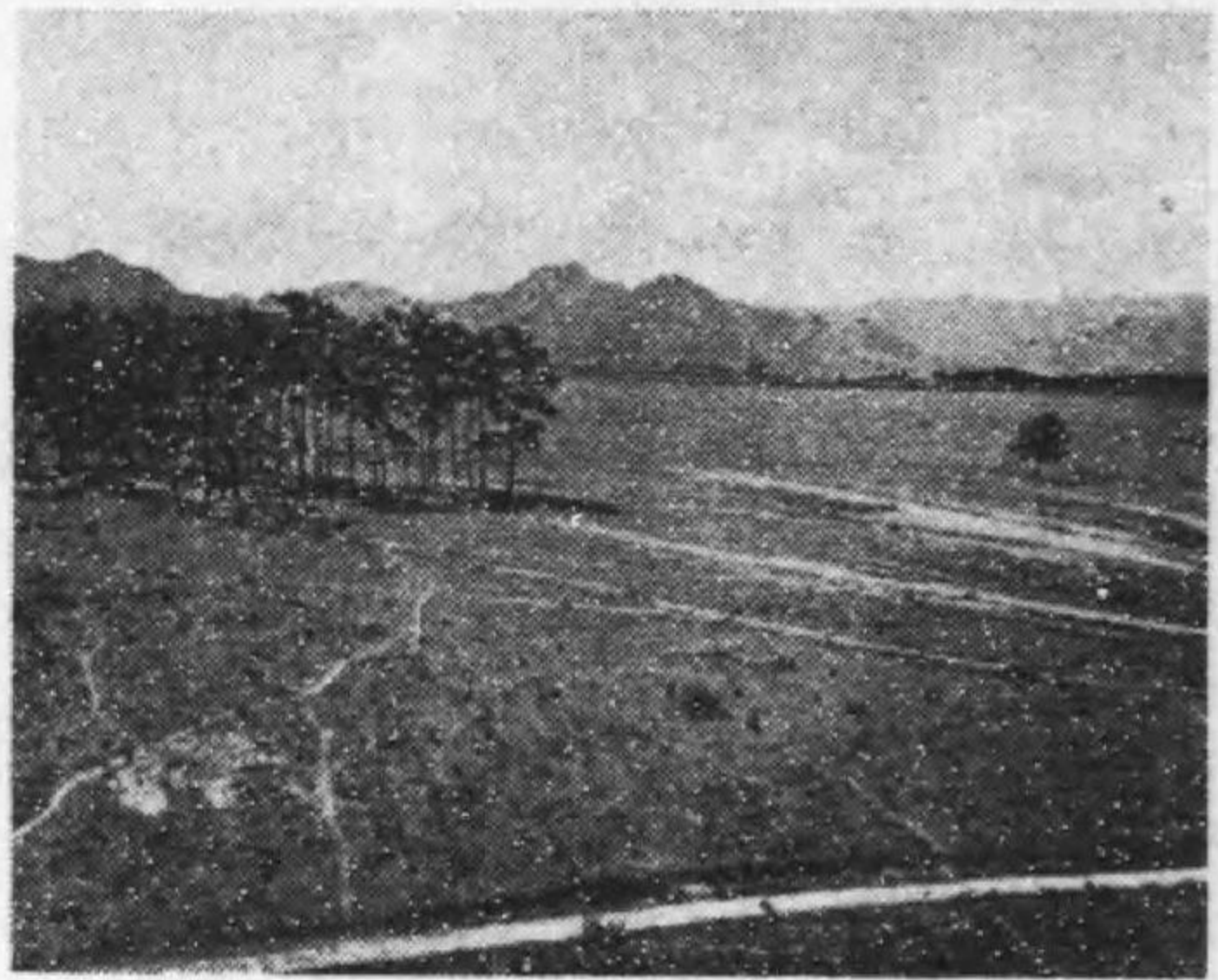
市の誇たるものに山陰家畜市場がある。明治四十四年家畜市場法によつて開始されてから約三十年の歴史を有し、主に和牛が取引せられてゐる。最近の入場頭數は一萬七千頭餘、賣買價格四百萬圓に達し、その範圍は三丹を本據に京都府・兵庫・鳥取・島根・滋賀・福井の諸縣に及び、山陰第一と稱せられる。

毎年十月施行せられる御靈神社の祭には廣小路に意匠を凝らした陶器の作り物あり、又各地の商人が露天を張り、殷盛を極める。この祭典の餘興に濫觴した福知山踊は、今は地方盆踊となり、福知山音頭と共にローカルカラー豊かなものである。

一〇、長田野

長田野、それは無季の俳句である。

來り去る雲の群に遅速はあつても、此の段丘の黄土には永劫の時
が宿り、矮小の松に悠久が陰を落す。時知り顔の小鳥が來なかつた
り、沼葦草の變化に氣つかなかつたら、長田野には春もなく秋もない。
下六人部村に椿が咲いても、東北麓の養殖池に、櫻の花びらが散り込
んでゐても、太鼓原の二本松には同じ松籟があるばかりである。強
ひて季があるとするならば、それは由良川や土師川や其の岸邊の村
を訪れねばならぬ、白南風や北海の風や丹波霧が一寸顔を覗かせて
去るその時だけである。上空を僅かに通り去る四季はあつても、ゆ
つくり地上に迄降りて來、根をおろして行くやうな四季はない。太
陽は野に近く巡り、天地初めて分かれた太古のまゝに靜かな時間が



長 田 野

場所とを與へて呉れる。

綾部街道と山陰街道と高嶽の峯々とに圍まれた長田野は略々三

流れてゐるばかりである。試みに其の間を歩いて見よ。『俺は闖入
者なんだ』と、フト感じ、驚き且、戦く事であらう。人間の存在を默殺し去
つて、寂然たる山靈、それを想うて頭を垂
れ畏まねばならない。人間存在の目的
如何と試練の問ひが投げかけられるか
も知れない。今日迄の行きがかりを全
部捨てさせ、人間本然の姿へと歸らせて
思索し冥想させるものは此の長田野を
措いてはさうはあるまい。茶室の庭と
同様、四季に變化の草花がなく、寂は何處
にも潜んで居て、幾らでも思索の時間と

角形をなし、四平方軒、四百町歩、福知山から半里である。北に古生代粘板岩の旗竿山、二子山が起伏し、南の開けた此の原は南陽を受けて明るいのである。沖積層の大段丘だといふ此の野原は酸化鐵に富んだ赤い粘土と珪質球狀の礫とが地肌である。そして浅い表面の土は腐植土といふ黒い土壤である。東端の太鼓原に立つと笹と芝との間に此の土が見え隠れしてゐる。酸化鐵が多く、沃土ならぬ此の原はあの武藏野の様に生活と自然とが密接の關係を持つ事は出来ないのである。それかあらぬか、明治四十三年六月六日、此の原は價格二十一萬圓で下六人部村から國へ賣却されてしまつたのである。あの太鼓原の北隅にスクラムを組んだ様な巨松の群は人家のあつた名残であると云ふ。

段丘の所々に陷落部があつて、殊に二子山下には大きな沼池がある。二百米四方もあつて其の名を『キレ池』と言ふさうである。眼下

の松林の間に藍綠色を帯びて静もつてゐる此の池には何時でも凄愴味が漂うてゐる。嘗つて村人は此の陷落部に水を湛へて灌漑用水としようと努めた事があつた。併し大蛇の住むと言ふ此の池は何回でも其の堤防を切つた。そして其の名も『キレ池』と言ひ、奇しき物語を持つに至つたのである。かうした沼池は石原から南六百米に一群、多保市附近に一群、廠舎の邊に一群、そして江戸ヶ坂附近に一つ、皆不透明な水を湛へ黙してゐる。此等の濕原には食蟲植物の群落があつたりする。みづごけ、もうせんごけ、みみかきぐさ、が自生し、さはらんが伸びたり、みくり、さはぎやう等の濕地植物がひつそりと生ひ交つてゐる。最も小さいはつちやうとんぼがこんな所に棲息してゐると云へば、愛らしい限りである。愛らしい生物を持つた此の沼池は、丘と丘との間に穩かに隠れて、長田野に生の息吹を與へてゐるのである。

長田野は一名大野ヶ原とも言つた。其の南麓の一部長田は大嘗祭の齋田に卜定された名所であり、後鳥羽天皇の御代に、中納言兼光は長田村を詠んだといふ。

神代よりけふのためとや八束穂に長田の稻のしな

ひそめけむ

(増鏡)

又民謡福知山音頭の歌詞に

福知山出て

長田野越えて

駒をはやめて

龜山へ

とある。聞く處に依ると此の背景は明智光秀が福知山と龜山(龜岡)の兩所に城を持つてゐた頃の話である。其の見廻り役たる福知山藩士、四方但馬守は急を告ぐべく、本城光秀の許へと馳せ參ずる事と

なつた。京街道(山陰街道)を東へ長田野を越えて行程十五里、龜山へと駒を速めたと云ふのである。そんな事が僅かに此の原の歴史となつたばかりであるが、星霜幾變遷、徳川時代となり、光格天皇の御代、朽木綱方侯は一日長田野に火技を見られたといふ事がある。又繪堂ヶ阪(又江戸ヶ坂)からすこし歩いた所を街道から南一町の谷間に養老水の清泉が残つてゐる。後櫻町天皇明和七年(二四三〇)福知山藩主六代綱貞侯の命名であり、藩侯の御料水であつたといふ。此の小公園に杖を曳く者はその昔を偲び、そして孝子芦田爲助翁の里近い事を思ひ、此の水が徒らに流れてゐるのではない事を想ふであらう。

御維新となり、明治末年となり、遂に野は練武地となり、尙武の臺地と變つたのである。一の段丘から一の段丘へと日に夜に往復する人々の姿を見る時、野の使命の容易ならぬを想ふ。野に砲の打殻が

落ちてゐたり、塹壕らしいものが一部覗いてゐたり、小松に目標がついてゐたりして、活躍の跡が何處にでもある。移動する人影が小丘の間に隠れる迄見送つてゐて、原の曠しさに驚いたりする。

長田野に入るには幾筋かの坂道がある。北に石原と雀部校と土からの三線、南に多保市、長田村、廠舎からの數線、そして西に中學校と江戸ヶ坂茶屋からの三線とがある。斯くて平均七十米の此の臺地の中央ではそれらの幹線が幾條にも錯綜してゐるのである。併し少しも迷ふ事はない。大體の方向を決めて、好きな方向に歩いて行つたら、たとへ、武藏野の如く人家は見えなくても、何時かは村に降りて來るのである。思ひきつて思索し冥想して歩くがよい。

夏の夜は石原から漆黒の原を訪れるべきだと思ふ。驛から坦々たる道が一軒半、容易に二本松に達するのである。そして太鼓原に一氣に直下する銀河の大いさに驚き、蝸や射手の星座が原にぐつと

近く落ち下つてゐるのを見る。原に既においた夜露に腰をおろして夜の神祕と宇宙の聲とを聞くであらう。そして誰しもきつと原を横切つて長田村方面に行つて見たくなるであらう。

夕陽を浴びて江戸ヶ坂下から野に登れば、低地の薄が浮き上つて輝いてゐたりして、秋を僅かに知つたりする事がある。

吹雪した朝には中學校裏から登るのもよい。道すがらの松と雑木との枝にはふつくらと雪がとまつてゐて、徑だけが落松葉の濕りを持つて續いてゐる。全く松林の隧道であり、孤獨の住む徑である。時々空が天使の衣の如く白くのぞいてゐたりする。松の梢を免れて僅かに落ちて來る雪は靜寂に徹して淋しいものである。徑が上りになつて空が開ける。そろ／＼原だと豫感がする。急に原に出る。車の轍が鮮明に雪に印してゐる。先刻此の原へ入つたらしい人々は原の何處かに紛れ込んでしまつてゐる。黄土と小松とで斑

點になつた雪原、それに大空から幾條も垂れ下つた雪雲の亂れは無氣味な灰色で移動をする。天地一如の此の雪の中に遠くの丘陰から時ならぬ喊聲が響いたりする。

陽春四月、石原からの登り道は山國巡禮を想はせるのである。行く事五百米、勾玉形の池には五六十株の櫻が咲き、出島があつたりして春の逝くのを惜しんでゐる。天田水産會養殖場といふ杭がある。道の左右には最近全く伐り開いて、眞黄になつた坊主山がなだらかにふつくらと並んでゐる。それから六百米、佛像を彫つた碑があつて、右はりま、左、京都と刻み添へてある。急坂二十米、太鼓原の晝は飽く迄も明かるい。四圍に翠巒がめぐつて然も遠い。有限にして無限である。子供が五六人原を横切つて地平の向うに降りようとしてゐる。其の姿がぼつちりと小さくなる。無限の平原だと云ふ錯覺に陥る。花一つない此の原。到底春も近づく事は出来ない。悠

久の住む原である。人の群が作業をやつてゐても、風が渡つて行つても音をたてない此の原である。年が年中、松のみどりがあるだけである。長田の里に降りぬ限り、麥もなく、桃もなく、椿もない。——
やつぱり永久に無季の原、長田野である。

一一、内宮山の自然

元伊勢内宮の境内には千古を語る老杉並列し、周圍は原始林のまゝにて靜寂其のものなり。神社の裏手にはさまざま廣からざる池あり、のびかゝりたる樹枝には年毎に森青蛙の卵塊を見る。附近は晝尙暗き境域にして自から敬虔の念わく。

谿谷を隔て、岩戸山あり。谷深くして清流あり。「かじか」の音眞夏に涼味を添ふ。春日、水邊には「いわぎり草」の可憐なるあり、むぎらんは椎の木の地上二米位のところに着き風情あり。「えうらくらん」

と共に南系の植物に屬し稀に見るの珍種たり。樹林中に見るはな
がかしは之亦南方の喬木にして他に稀に見るもの、之等南系植物が
此の神域に残留するも亦神の加護にやあらん。

新緑の頃には百鳥此の杜に集ひ、未明の頃より「ほととぎす」一聲高
らかに鳴けば他鳥之に續き、「三光鳥」の如きも此の森を訪れて後、叡山
に向ふといふ。初夏には樹間を飛び交ふ「オホムラサキ」、「クロタイマ
イ」の艶姿あれば又腐木の下には陸貝類のひそむありて採集家の眼
を樂しましむ。此の内宮山、岩戸山の神境は幽玄なる靈域として人
の心を清むると共に千古不伐の原始林を有し、近畿地方他に見ざる
植物を藏し自然物の寶庫として尊重すべき靈地なり。

一一一、田倉山と夜久野ヶ原

田倉山火山

田倉山火山は天田郡の西端に位し但馬國朝來郡に跨る火山であ

る。山陰線上夜久野驛から頂上まで一時間内外で達し得られる。
標高は三五〇米で火山としての規模は小さいが美しい火山丘、噴火
口、熔岩原を備へ南方から眺めると山體は富士山を小型にした極め
て美しい圓錐形である。

夜久野ヶ原

スキー場

田倉山の南麓に展開する熔岩原は「夜久野ヶ原」と呼ばれ長さ五軒
幅一軒、平らかな台地であつて處々に饅頭形の丘を交へてゐる。夜久
野ヶ原スキー場も此等の丘の二三のものを利用したものである。

玄武岩

田倉山の噴火は地質學者によれば第三紀の末から第四紀の洪積
世にかけて行はれたものと推定されてゐる。若い火山であつて風
化浸蝕は進んで居らず此處に生育する植物も種類が乏しい。噴き
出されて出來た岩石は玄武岩である。従つて玄武岩の分布状態を
しらべると噴出した區域が明瞭となる。

田倉山の頂上は眺望よろしく熔岩の流れ出た範圍は美しい原と

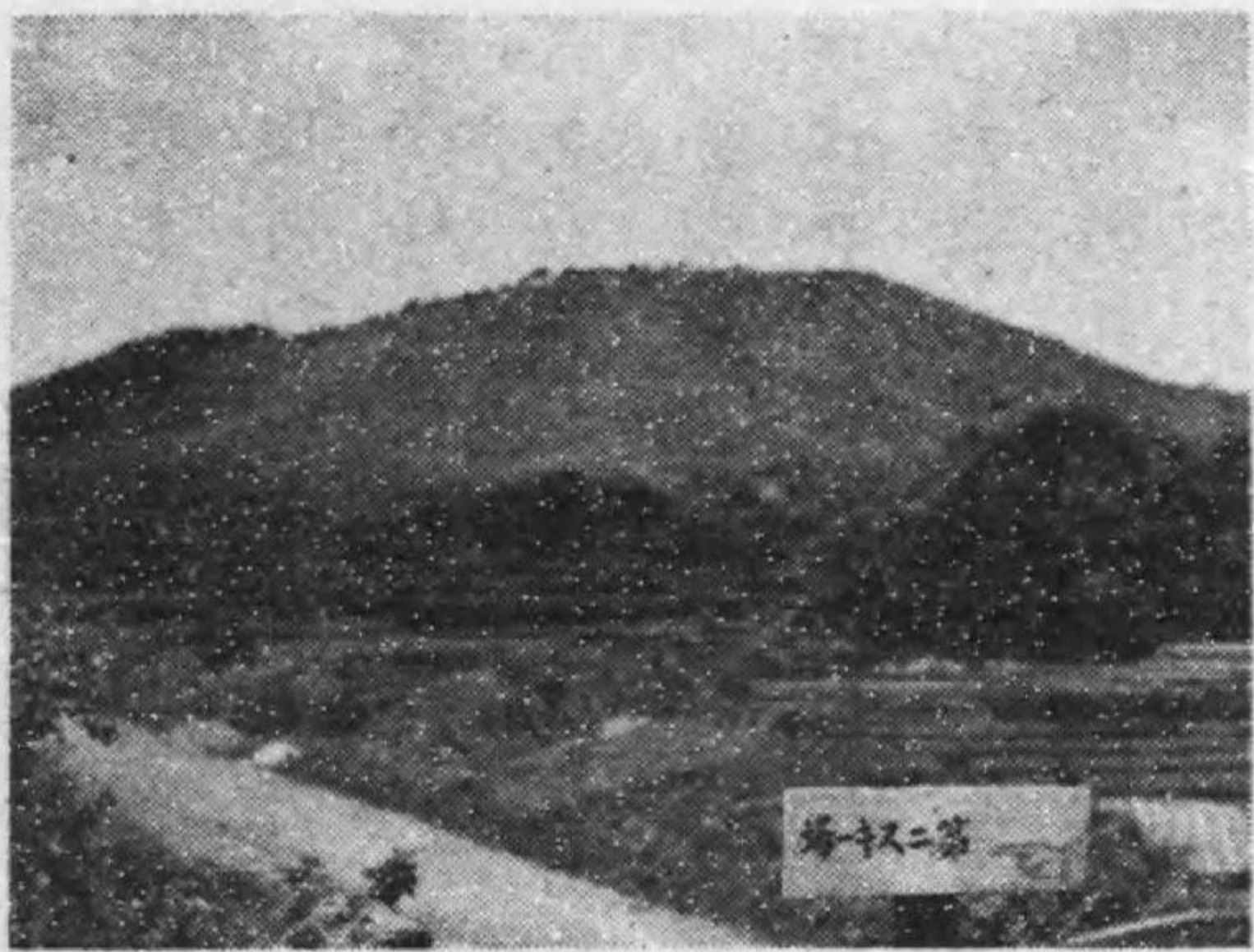
長者ヶ谷

なつて一望のうちをにをさめられる。森あり、畑あり、其の間を點綴す

る村落、銀線のやうな牧川、之等はよく調和がとれ、まさに一幅の繪である。

山上の細道には夜久野八十八ヶ所の石像が並び立ち、噴火口は馬蹄形の緩傾斜となり、現在「長者ヶ谷」と呼ばれてゐる。

春の田倉山、夜久野ヶ原は所謂夜久野つゝじとして有名な「レンゲツツジ」で賑ふが、草間の「ハルリンドウ」の可憐さも眼をひく一つである。秋此の山を訪れて驚くのは一米位の盆栽にも相應しく思はるゝやうな「しば栗」が意外にも多く結實し、到るところに見られるのともみつけたや



田倉山の全望

うになつてゐる。「秋ぐみ」が全山に自生してゐる事とである。山麓の「ウメバチサウ」は秋に深みを添へてゐる。盛夏にはいづこよりか湧き流るゝ清水、谿谷を傳ひ來る涼風、此の高臺ならでは味ひ得ぬものがあり、冬日は鐵路の便により多數のスキー家を悦ばせてゐる。

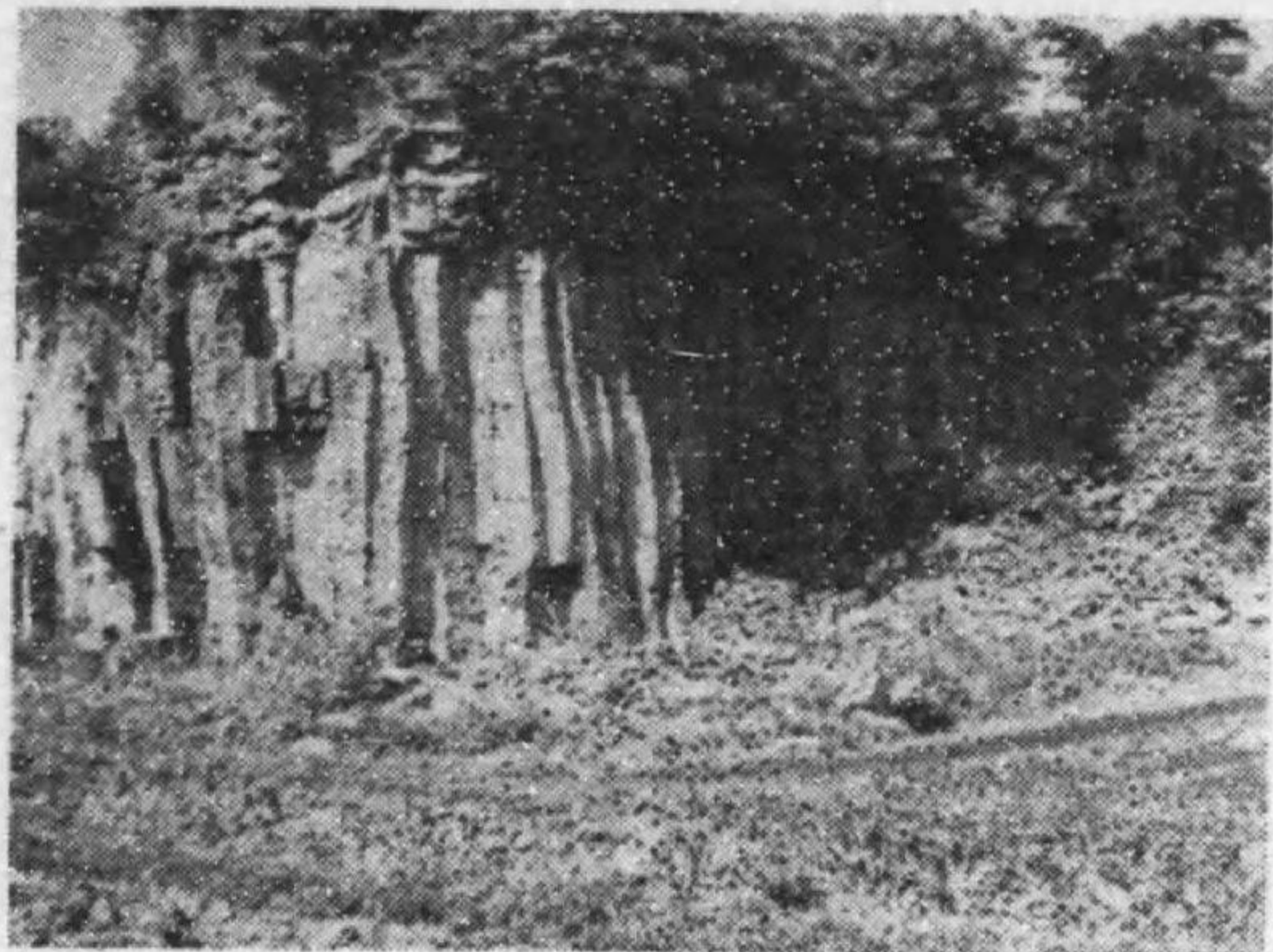
夜久野に産する玄武岩は石材として廣く用ひられる。中夜久野村高内は玄武岩を石碑其他に加工し、福知山京阪地方に搬出する。高内石と呼ばれ、此の村の過半数の生計は之によつて支へられる。

夜久野ヶ原は年と共に開墾せられ、現今は一地方の産業上、缺くことの出來ぬ天與の地と化した。到るところ桑園發達し、畑には陸稻、芋、大根、大小豆、蕎麥等が栽培せられる。芋、小豆は其の味よろしく、蕎麥の如きは風味佳良で、夜久野蕎麥の名が高い。柿、栗などもよく管理された果樹園に見事に育つてゐる。

回顧すれば、此の夜久野ヶ原は應仁の昔、丹波から討入つた細川方

内藤塚

茶堂



玄武岩柱状節理

田倉山、夜久野ヶ原は一日の行程として好箇の見學地である。熔

の内藤備前守と但馬を守る山名方の太田垣新兵衛尉との古戰場である。さしも勇武の備前守も武運つたなく壯烈な最期を此の原にとげ、往時を語る内藤塚のみさみしく残つてゐる。原の中央に茶堂がある。寛政の頃、信州稻荷の人、貞心雲水が初めて庵を此の位置に定め、水脈を發見し水を此處に引き取り當時行旅者の水に困じた者を助けたと傳へられてゐる。爾來此の處を茶堂と呼び、大師堂や鐘樓が立ち、人家も四五戸出來てゐる。僧貞心の碑並に茶堂水碑も傍に現存してゐる。

柱状節理

岩台地の周縁には美しい玄武岩の柱状節理が見られ、四隣には諸種の火成岩や古生代、中生代の地層が發達し、玄武岩との關係も興味が深い。驛前にあたる水坂には湖水堆積層があらはれ、大油子には玄武岩噴出當時牧川を遮斷した證跡が見られ、珪藻土も産する。高内には侏羅紀の礫岩や同紀の石灰岩の露出がある。此の石灰岩には海百合等の動物化石が含まれてゐる。臺地の南側、田之口に通ずる道路に面して柱状節理の風化状態、火山灰堆積の有様を如實に示す地點がある。之より稍、西に進めば玄武岩採取場がある。巨大な玄武岩の柱は規則正しく並び、真に一偉觀である。節理の規模の大きいことは驚嘆に値するが位置が偏在してゐる關係上人々には知られてゐない。此の採取場を抜け臺地の上に出ると夜久野ヶ原の開墾の模様が明かとなつて來る。茶堂に向つて進むとやがて裾野を曳いた田倉山の眞の美しい姿が眼前に浮び出る。初めて、嫩草山よ

りもはるか美し」と詠まれてゐる歌の心も汲み取ることが出来る。茶堂を経て上夜久野驛に向ふ道中では高臺を歩む快味を味ふことが出来る。

何時來て見ても田倉山、夜久野ヶ原には一種の魅力がある。山の形にも、岩石にも、空氣の感觸にも——その因るところは此の一小地域に火山要素が備はつてゐるせいであらう。晩夏の夕、桔梗、女郎花の裾野に立つときは靜寂の中にしばし自分を忘れ去るのである。

一三、郷土の著名な神社

天田郡だけでも略百社に達する神社を、校下三郡に互つて巨細に説明することは許された紙數内では不可能であるし、又餘り専門に偏することも郷土史としては如何かと思はれるのでこの章では校下の著名な神社を一通り話すこととする（惟ふに諸君は既に小學校、國

民學校に於て自分の市町村の氏神、産土うぶすなに就いては教へられて居る筈だから、如何なる神社を著名なものとなすかに就いては種々な見解もあらうが社格の上から見ては府社、郷社、歴史的由緒の點から考へて延喜式内社、國史現在社を擧げるのが最も至當のやうに思はれる。

一 延喜式内社

醍醐天皇の御代に延喜格式が制定せられ、中でも延喜式最初の十卷は神祇に関するもので、その中には五畿七道に散在した天神地祇三千一百三十二座が擧げてある。この延喜式神名帳に載せられて居る神社が即ち延喜式内社で、丹波國七十一座、その中天田郡五座、何鹿郡十一座、加佐郡十一座が載せられて居る。

二 府社（縣社）

例祭、祈年祭、新嘗祭に府より神饌幣帛料を供進され、鎮座府民の崇敬を寄せる神社である。

三 郷社

數ヶ町村に及ぶ區域にかけて總鎮守とせられる神社で、郡役所のあつた當時、神饌

幣帛料は郡より進められたが今は府より奉られて居る。併し府社とは、尙ほ判然たる等差が置かれて居る。

四氏神

その名の示すが如く、もとは一族がその氏族の祖先を守護神として祀つたものである。故に氏族は皆その祖神から出た子孫であり、これを氏子と言つた。後、氏族制度が崩れてからは氏神、氏子の間には古代に於けるが如き密接な關係は認め難くなつた。現在は町村の鎮守神を氏神といひ、その鎮守區域に住むものを氏子といつて居る。

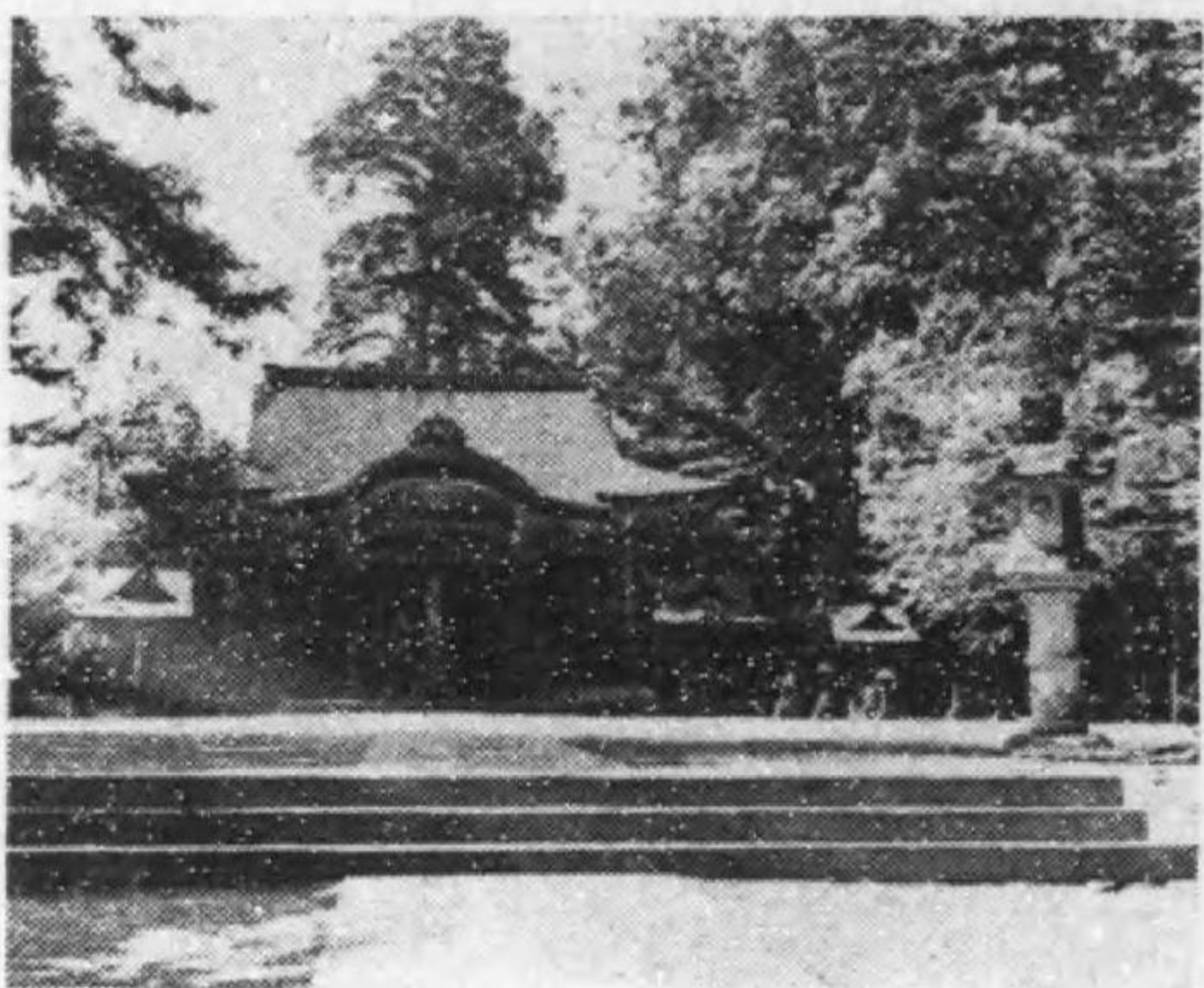
五産土神

「うぶ」は生むと同義、「すな」は土地の義故に産土とは各人の「生れた土地を言ひ、産土神とはその生れた土地を守護し給ふ神である。

これから郡別に上記の著名な神社を擧げてみよう。

【天田郡】府社二郷社一、式内社五

府社一 宮神社 福知山市字堀



一 宮 神 社

祭神 大己貴命(大國主命の別名)

由緒 天田郡の一ノ宮であるから社號となつたと稱せられ、社傳には文武天皇慶

雲四年鷹子王の創建といふことである。兩丹地方には鷹子王と稱する傳説が頗る多いのである。この地は天正年中、明智光秀の所領となり、福知山と稱せしより以來、代々の城主この神社を以て鎮守神とし、社殿を修造し社領を寄せたことなど、數次に及んでゐる。又、福知山市一帯の産土神である。

府社 大原神社 川合村大字大原

祭神 伊邪那美尊、天照大神、月夜見尊

由緒 もと北桑田郡野々村に鎮座されたが、

神託によつて文徳天皇の御代に現社地に遷祀したと傳へて居る。(或は後宇多天皇の御代ともいふ)

天正年中、明智光秀がこの地に封ぜられた時、その兵燹に罹つて社殿が烏有に歸

したが、明暦年中に至り社殿の復舊を見、寛文十一年綾部領主九鬼氏は更に社領を寄進した。

郷社 **天照玉命神社** 福知山市字今安

祭神 天照玉命

由緒 祭神天照玉命は、天照國照彥火明彥速日命と傳へられ、口碑には垂仁天皇四十五年倭姫命の御創祀であるといひ、或は成務天皇の時、祭神の後裔大倉岐命が奉祀せられたとも傳へて居る。中世以來、國司領主の崇敬が篤かつたが、天正年間兵燹に罹り、承應二年福知山藩主松平氏社殿を改築し、社領五十石を寄せ、爾後朽木氏藩主となつても尊仰渝ることなく、この地方の産土神である。

式内社 生野神社 上六人部村字三俣

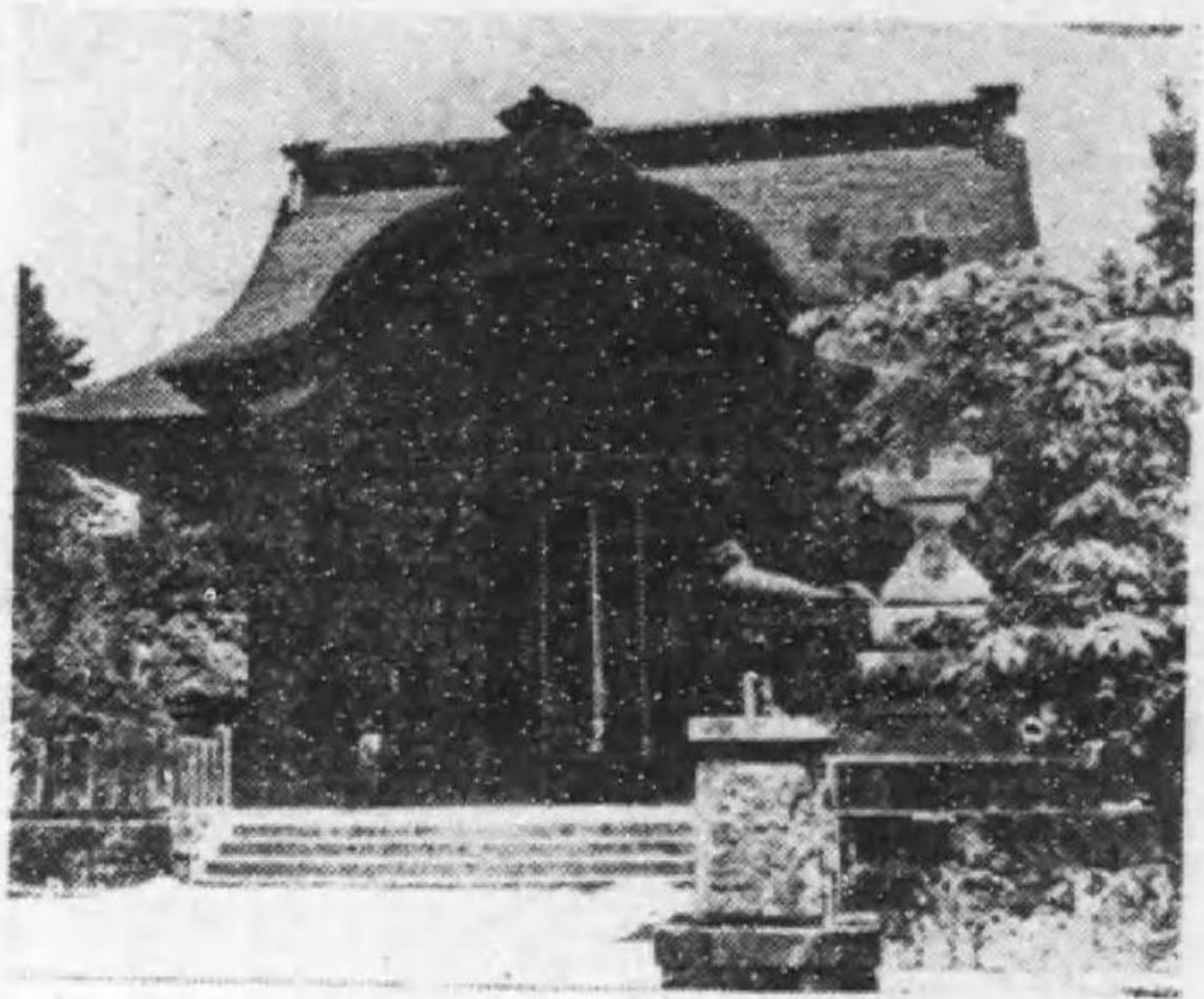
祭神 天鈿女命

式内社 荒木神社 福知山市字堀

祭神 天神七代、地神五代の神

式内社 庵我神社 福知山市大字中

祭神 天穗日命、應神天皇、神功皇后、生島神



高津八幡宮

式内社 阿比地神社 西中筋村字興

祭神 天照大神

註

一の宮

醍醐天皇の御代以降諸國に於て國內の主
要なる神社に等級を附して之を格別に重
んずる風を生じた、即ちその國內に於て最
上位に在るのを一宮とし以下順次二、三、四
宮等の順序が附けられた。その順位は國
司奉幣の次第に依つたと言ふ。かやうに
等級が附けられると公私の崇敬が一宮に
傾くのは自然の勢であつて之がために一
宮は國內の代表的神社となり益々尊貴な

地位を占めるに至つたのである。

丹波國の一宮は南桑田郡千歳村にある國幣中社出雲神社、出雲大社の神靈を分祀し大己貴命を主祭神として奉齋すである。福知山市の一宮神社は天田郡の

一の宮といふ意味で、校下にも同様一宮、二宮、三宮を神社名としたものが他にもある。

【何鹿郡】府社一、郷社一〇、式内社十一

府社八 幡宮 中筋村大字高津

祭神 應神天皇、玉依姬命、仲哀天皇、仁德天皇、神功皇后

由緒 社傳に陽成天皇の御代、國守橘良基、勅を奉じて創建したがこの地は元來、石清水八幡宮の所領であつてその別宮の一といふことである。

明應九年炎上——文龜元年再建せられたが、江戸時代には綾部藩主九鬼氏尊崇し社領、什器を寄進した。現在の社殿は嘉永五年の造營で宏壯である。

郷社 赤國神社 以久田郡大字館

祭神 瓊々杵尊、猿田彦命、天宇受賣命

由緒 社名の起りは丹波を丹國と書き更にそれを赤國とも書いたからであるといふ。天正年中、近衛關白の丹後國天橋立に遊覽の途次、この神社に一泊せられ、その後正一位赤國大明神の額を寄附せられた。慶長五年兵燹に罹り社殿寶物

文書等悉く亡失したと傳へて居る。今傳存してをる金銅鳳凰は正和年間、日下司源光高と刻し明に當代の神輿に用ひられたものと考へられるが亦以て由緒を語るべき資料である。

郷社 島萬神社 西八田村大字中筋

祭神 須佐之男尊、足名椎命、手名椎命、櫛名田比賣命

由緒 創紀年代は不詳であるが、社傳には天平九年痘瘡の流行した時、社殿を修造したというて居る。延喜式内社に列せられたが爾後の沿革明でなく、近世にては慶安二年、元文元年の兩度改築を行つて居る。

郷社 須波岐部神社 物部村字物部

祭神 天照大神

由緒 社傳には延暦八年に創祀せられ、大同二年この須波岐山に遷祀せられたと傳へて居る。清和天皇貞觀十一年神階を從五位下に進められた。社殿は元文四年再建したものである。

郷社 河牟奈備神社 口上林村字十根

祭神 天下春命

由緒 社傳に據ると、和銅年中の創祀であるといふ。元龜天正の頃の兵火のため社記の存するものが無いが、後朱雀天皇及び安徳天皇の大嘗祭の時に主基地方の風俗歌として丹波國神奈備山を詠まれて居るのは、この神社の山を指したのであらう。

郷社 式内社 阿須々伎神社 志賀郷村字兩河内

祭神 天御中主神、高皇產靈神、神皇產靈神、道主貴命

由緒 社傳に神武天皇六年物部氏の創祀で、和銅六年に改祭せられたというて居る。三代實錄に、元慶三年十一月九日にこの神社に慶雲が見はれたことを國司が言上したと記してある。當社を又、吾雀宮とも稱したといふ。これは當村を吾雀莊と呼んだからである。

郷社 若宮神社 綾部町大字本宮

祭神 仁徳天皇

由緒 創建時代は不詳であるが、口碑に據れば平重盛の奉祀といふことである。寛

郷社 八幡宮 綾部町字井倉

平十年九鬼氏が綾部藩主となつて以來崇敬厚く代々渝らなかつた。

祭神 應神天皇、仲哀天皇、仁徳天皇、神功皇后、武内宿禰

由緒 社傳には、治承年中平重盛の創祀といふのであるが文獻の存するものが無い。江戸時代には藩主九鬼氏並に藩士の尊信した社である。

郷社 八幡宮 中上林村字八津合

祭神 應神天皇、伊邪那岐尊、伊邪那美尊、大山祇神

由緒 建武二年十月、石清水八幡宮の分靈を奉祀したのである。後、天正年間、仁木某社殿を破壊したが織田氏の臣、これを修造しその後、又、明智光秀の破却に遭うたが延寶二年に至り全く復興した。爾後、領主の崇敬も淺からぬ社であつた。

郷社 高倉神社 吉美村字高倉

祭神 以仁王

由緒 社記に據れば、高倉宮以仁王は治承四年の亂に、流失のため山城國光明山にて薨去と傳へて居るが、實は從者、大槻光頼等竊かに當地に供奉し、吉美庄にて終

に薨去あらせられたので、その後、養和元年、奥谷ノ森即ち現社地に奉祀したといふことである。

郷社八幡宮 山家村字廣瀬

祭神 應神天皇

由緒 創祀年代は不詳であるが、谷出羽守衛友が封をこの山家に受けた時、弓矢の神として奉祀したのであらうと傳へて居る。

式内社 佐須我神社 佐賀村大字私市

祭神 須佐之男命、足名稚命、手名稚命

式内社 高藏神社 物部村大字西坂

祭神 武内宿禰

式内社 福太神社 西八田村字上八田

祭神 須佐之男命

式内社 御手槻神社 以久田郡大字位田

祭神 御手槻神

式内社 佐随神社

位久田村栗の大川大明神と同村の澤官大明神とが式内社佐随神社を争うたため何れとも指定されず。

式内社 伊也神社 山家村字廣瀬

祭神 天照大神、須佐之男尊、月夜見尊

【加佐郡】 校下の部 府社三、式内社一

府社 皇大神社 河守上村大字内宮

祭神 天照大神

由緒 崇神天皇三十九年より四ヶ年間、豊鋤入姫命が天照大神を奉じて駐らせられた吉佐宮の舊址であると社傳には説いて居る。又用明天皇の御子麻呂子皇子が賊徒御平定の際祈願せられ社殿を造替へられたとの傳説もある。江戸時代には明暦二年藩主京極高國社殿を改修して以來代々の藩主之に倣うて尊崇を篤くした。延寶五年には徳川氏も社領四石餘を寄せた。この神社は上記の傳説により元伊勢と言はれて居る。

府社 豐受大神社 河守上村大字天田内

祭神 豐受大神、瓊々杵尊、天兒屋根命、天太玉命

由緒 このも元伊勢と稱し、豐受大神の御舊蹟と傳へて居る。亦麻呂子皇子の御祈願及造替等の傳説がある。明暦二年徳川家綱が病んだ時、藩主京極高國が本殿等を修營し、爾來代々の宮津藩主が崇敬の誠を致した神社である。

式内社 大川神社 岡田下村大字大川

祭神 五元神

由緒 農桑を司り給ふ神として有名である。創紀年代は明かでないが、清和天皇貞觀元年及び十三年に神位昇進のことが見え、郡中の名社である。

註

元伊勢

太古、天照大神並に豐受大神が丹波古は現在の丹波、丹後を總括した廣い地域を稱したが、和銅六年北部の五郡を割いて丹後國を置いたに、御鎮座あらせられたといふ古傳説に基き、吉佐宮址(天照大神御鎮座地)比沼眞名井舊址(豐受大神御鎮座地)が當地方には多い。

吉佐宮址

皇大神社 (加佐郡河守上村)

天橋立切戸文殊境内 籠神社 (與謝郡府中村)

眞名井舊址

豐受大神社 (加佐郡河守上村)

藤社神社 (中郡五箇村)

奈具神社 (竹野村、深田村)

岳南讀本終



昭和十七年九月廿二日印刷
昭和十七年十月一日發行

非賣品

福知山市字士師

編輯者兼 京都府立福知山中學校

代表難波保明

京都市下京區西洞院通七條下

(西京七) 内外出版印刷株式會社

印刷者 代表須磨勘兵衛

福知山市字士師

發行所

京都府立福知山中學校

終